昭和48年1月21日発行通巻96号(毎日曜日発行) 昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日＝ラルース

1/21
220円
95

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

総監修
岡田　要　日本学士院会員
末廣　恭雄　東京大学名誉教授
古川　晴男　前東京学芸大学教授
宮地伝三郎　京都大学名誉教授
山階　芳麿　山階鳥類研究所理事長

編集委員
阿部　宗明　農林省東海区水産研究所技官
上野　俊一　国立科学博物館研究官
浦本　昌紀　山階鳥類研究所所員
小原　秀雄　女子栄養大学教授
日高　敏隆　東京農工大学教授
堀越　増興　東京大学海洋研究所助教授

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　この〝百科〟は動物を機械的に50音順に並べたものではありません。系統だった分類に従い，次のような順序と冊数でお届けしております。概説（２），哺乳類（62），鳥類（64），爬虫・両生類（16），魚類（16），軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物（32）。現在，哺乳類が終了し，65号から鳥類が続々と登場しています。《1～128号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけでなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとに総目次，64冊ごとに収録類別の索引をつけ，また最終の192号には詳細な総索引をつけます。

「私たちの仲間」のページ　第一線動物学者の執筆による解説と注があります。また〝動物週刊誌〟として，ニュースや話題，楽しい読物，ペット相談などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を発行順に16冊ずつ，美しいファイル（定価600円）に，とじこんでください。堅牢豪華な〝動物百科事典〟全12巻がそろいます。なお，バックナンバーのお求めは，表３「本誌の購読について」をごらんください。

目次

世界動物百科　第95号

カラーページ

私たちの仲間

表紙　トラフズク　Ph. A. Fatras
表2　**日本迷鳥録**　クロハゲワシ

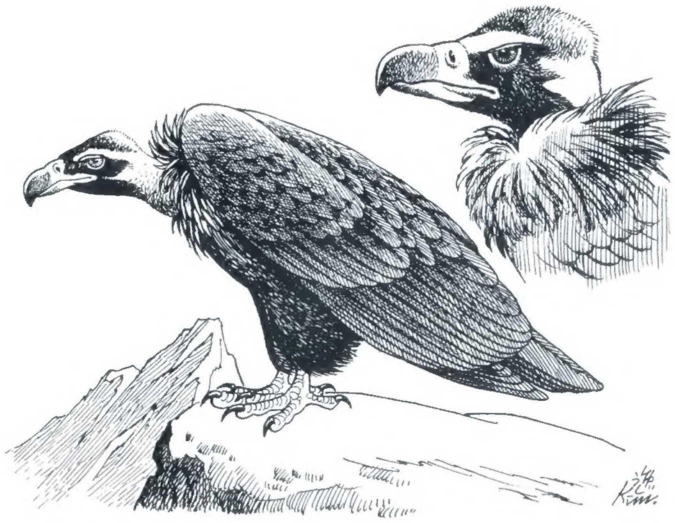
監修　森岡弘之（国立科学博物館研究官）
翻訳　大沢寛三（本誌編集部）

凡　例
□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要な語には，〔注１〕と番号を入れ，「私たちの仲間」第27ページに，同番号で記載した。なお末尾にページ数（上両端）を付記した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。和名の多い場合，併記しているものもあるが，専門家と協議し，編集部で決定した。和名のないものは，英語名または仏語名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または現地読みを原則としたが慣用の固定しているものは，それに従った。

◆日本迷鳥録◆ 30

クロハゲワシ

Aegypius monachus



文　内田康夫
え　木村しゅうじ

珍鳥迷鳥のたぐいばかりを，目の色変えて追いかける連中をさして，世にレアリティー・ハンターという。レアリティー，つまり珍しいものを求めるのは，鳥にかぎらず，およそ趣味の世界に共通していることである。この呼び名は，多分に軽蔑（けいべつ）の響きをもっているが，必ずしもつねに排斥すべきものではない。ある意味でそれは，一度は通るであろう一過程でもある。わたしもごたぶんにもれず，ずいぶん珍鳥を追い，また，見つけもしたが，今は少しくたびれた気がする。しかし，それでもまだお目にかかりたい種類も残っており，クロハゲワシはそのひとつだ。

日本では，釧路，福島，静岡，兵庫，鳥取，高知，沖縄などで記録があり，最近も鹿児島県下で発見されたというニュースがあった。しかし人目にたちやすいため，すぐ撃ちおとされたりする。ユーラシア大陸中央部を東西に長く分布し，全長約1.1メートル，全身黒褐色（こっかっしょく）でくびの皮膚は裸出し，それを取りまく淡褐色のえりまきがある。■

© 1972 ASAHI SHIMBUN, Tokyo, pour la langue japonaise · Librairie LAROUSSE, Paris · RIZZOLI EDITORE, Milan.

海からの使者 上
ピロウラス・ジャック

藤原英司
え　清水　勝



海は命のふるさと。そして人びとの営みをささえるもの。その海を舞台にして，人間と動物が織りなす3つのドラマをご紹介します。

1800年代の終りごろ，ニュージーランドのクック海峡で，夜の海を航行していた船の船員が，不思議な光景を目撃した。

船がピロウラス水域にはいってまもなく，船員が，なにげなく舷側から外を見ると，暗い海中を青白い閃光が走ったのである。光は燐光のような冷たい輝きを帯び，舷側に沿ってすばやく通りすぎた。

発光体は細長く，長さは4,5メートル近くあった。その光るものは，しばらくするとまたもどってきて船の下へもぐりこみ，反対側へ移った。しかし，それも束の間で，すぐにまた，元いた側へやってきた。

船は約15ノットのスピードで走っていたが，海中の光り輝く奇妙なものは，船と同じスピードで楽々と，暗い水のなかを走っていた。それどころか，ときどき，ふわりと舷側に近づいたかと思うと，すぐに離れ，またしばらく進んだあと，ふたたび船腹にすり寄ってきた。

ポリネシアの海には，タニウハといわれる怪物がすんでいるといういい伝えがある。この怪物は陸にもいて，陸上のものは龍のような形をし，性質は獰猛で残酷だといわれている。だが海にすむタニウハは，気だてがやさしく，船乗りの友だちだとされていた。

暗い海のなかで，船を慕うように舷側を走る閃光を見ているうちに，船員は，ふと，これがタニウハではないのだろうかと考えた。かれが幻惑されたように船ばたから海中を見おろしていると，突然，その光るものが勢いよく浮上してきて，海面から飛びあがった。

光り輝く燐光は，水しぶきとともに砕け散り，まるで青白い花火が破裂したような壮麗な光景を呈した。

この燐光に包まれた不思議な物体は，1887年ごろから，クック海峡を往復する船の船員が，たびたび目撃した。その不思議な物は，とくに，北島のウェリントンと，南島のネルソンのあいだを往復する船のそばに出現した。ウェリントンを出た船がピロウラス湾の入り口にあるシェトウォド島のあたりへ近づくと，いつもその光る物体が現われ，ダービル島と南島を隔てる狭いフレンチ水路にまでついていった。そして船が水路へはいり，アドミラルティ湾の西端にあるコリネット岬までいくと，その海中の閃光は，こつぜんと姿を消した。

謎の動物

この海中の光る物体は，その後もたびたびピロウラス水域に姿を見せ，しじゅう人びとの噂にのぼるようになった。そしてそれは魚のからだに夜光虫がついたものだということがわかり，また多くの人がその大魚を目撃した。しかしその大魚は海面へ浮かびあがって噴気をあげるところから，人びとはそれをクジラの一種だと考えた。そしてまもなくだれいうとなく，その大魚のことをピロウラス・ジャックと呼ぶようになった。メルビルの小説『白鯨』にニュージーランド・ジャックというクジラが登場するが，人びとはそれにヒントを得て，その魚のことをジャックと呼ぶようになったらしい。

ピロウラス・ジャックが，船と行動をともにする海域は決まっていた。ネルソンからの船がコリネット岬にさしかかると，ジャックが現われた。そしてそのあと数キロのあいだ，船といっしょに進んで，フランシス岬のあたりまでいくと，そこで船と別れた。このため，ピロウラス・ジャックの遊び場は，コリネット岬からフランシス岬およびシェトウォド島近辺にいたるアドミラルティ湾とピロウラス・サウンドのおよそ10数キロの海域ではないかと考えられた。

ジャックが現われる場所が決まっていることがわかると，船長のなかには，いたずらをするものがでてきた。そろそろジャックが現われそうだとなると，汽笛を鳴らすのである。そしてうまくジャックが姿を現わすと，乗客のなかには，ジャックが汽笛に呼ばれてやってきたと信じこむものまであった。

だが，こんないたずらは，むじゃきなほうで，そのうちに，ただのいたずらとは思えない悪質な事件が起こった。船からライフル銃で，ジャックをねらい撃ちにした男がでたのである。

ピロウラス海域の人たちは，この話を聞いて怒った。そのあたりの人びとは，みんなピロウラス・ジャックを，自分たちの友だちのように思っていたからだった。

人びとは，さっそくジャックを法律で守れという運動を起こした。ちょうど1901年になったばかりのころだった。この年は，イギリスでビクトリア女王が死に，アメリカではマッキンレー大統領が暗殺された年である。日本では，この前の年，北清事変が起こった。アメリカでは激減したバイソンに対して，ようやく保護の手が加えられようとしていたが，世界の大勢は，まだあくまでも人間本位であり，国や民族によっては，動物を法律で保護することなど，まさに狂気のさたと考えた時代だった。

そのような時代に，ピロウラス・ジャックを法律で守れという運動を起こしたニュージーランドの人たちは，動物保護のうえでは，まさに敬服すべきパイオニアであったといわなくてはならない。

ジャックが撃たれてまもなく，ニュージーランドの人びとを，ますます激怒させるようなニュースがもたらされた。ヨーロッパの博物館がピロウラス・ジャックの噂を聞き，その珍しい〝謎の動物〟を，高い値で買いとろうといいだしたのである。ジャックをライフル銃で撃った男は，ひょっとすると，博物館の賞金めあてだったのかもしれない。

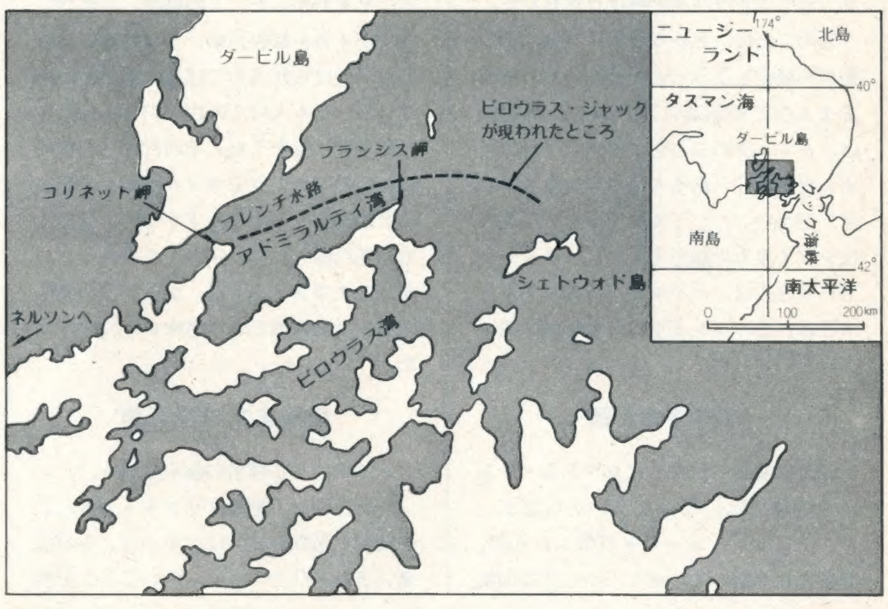
さいわいそのときの弾は，ジャックには当たらなかった。しかし，博物館が報賞金をだすとなると，ピロウラス・ジャックは，いつ殺されるかわからなくなった。そのため人びとは怒りと焦燥のうちに，ジャックの保護対策を当局に迫った。

身元調査

ジャックを守れという人びとの要望にこたえて，当局は行動を起こした。だが，ここで困った問題が起こった。〝謎の動物〟や〝白い魚〟ということしかわからなくては，法律による保護の加えようがない。そこでまず第1に，人びとが騒いで守ってくれといっている動物がなにかということを確定しなくてはならなかった。

ところが，これがなかなかたいへんだった。ピロウラス・ジャックを見たという人の話をきいてみると，みんながてんでにいろいろなことをいった。

ある人は，ジャックのからだの色は，背中が薄い灰色で腹が白いといった。また，明るい灰色という人もあれば，白かクリームという人もいた。さらに，白，



私たちの仲間
95号…1月21日



灰色，黒ネズミ色のまだらにみえたという人もいたし，ネズミがかったクリーム色で，黄色といってもいいという人までいた。なかには〝ひどい年寄りに見えた〟と，まことに抽象的な表現を使う人もいた。

だが，人びとがいったことで共通していたことは，白っぽい背中一面に，引っかき傷のような跡がついていたということで，人によってはそれを〝まだら模様〟と表現したのだった。

そのほかのことで，人びとのいうことが一致したのは，背中に立っているひれと，ずんぐりした頭，それにクジラを思わせる尾ということだった。

この海域には，背びれがあって，クジラのような尾をつけ，ずんぐりした頭のイルカがいた。マゴンドウであるが，地元の人びとはこれをブラックフィッシュと呼び，からだは全体が黒かった。

ところで，クジラとイルカとゴンドウと３つでてきたが，これらはどう違うのだろうか。分類学上の細かい議論は避けて，わかりやすく，ごく大まかにいうと，つぎのようになる。つまり，この３つはすべてが分類上クジラの仲間とされるが，からだが大きいものをクジラといい，小さいものをイルカと呼んでいる。ゴンドウは体長が４，５メートルから８メートルぐらいあり，いわばクジラとイルカの中間に存在する。そのため，ゴンドウは，古来ゴンドウイルカと呼ばれたり，ゴンドウクジラと呼ばれたりした。

このことは，ピロウラス・ジャックの種名を確定しようとしたときにも，そのまま人びとの議論に現われた。ある人は，ジャックのことをドルフィン（イルカ）だといい，ある人はホエール（クジラ）だといった。ドルフィンといった人はシロイルカの類を考えたし，ホエールといった人は，パイロット・ホエールとも呼ばれるマゴンドウのことを頭に描いていたのだった。

花模様の大頭

議論は沸騰したが，ピロウラス・ジャックの種名は，なかなかわからなかった。とにかくジャックを目撃した人は，興奮した感情にまかせて，かってな印象を語った。興奮がおさまった人の話を聞いてみても，今度は時間がたちすぎていて，印象が希薄になり，語ることの焦点がぼやけていた。そこで実際に見ようといって出かけてみても，相手は水のなかを気ままに泳ぎまわっているので，全貌を明確に捕えることができなかった。

こうして，たちまち，２年ぐらいたってしまった。そのころ，世のなかには，ちょうど写真機が一般に出まわりはじめていた。そして船客のなかには，ジャックの写真をとった者がいた。そこで，ウェリントンの気象庁に勤務する D. C. ベイツは，ジャックの写真を，できるだけたくさん集めてみた。

写真は雑多なものだった。あるものには頭だけが写り，またあるものには，背びれだけが写っていた。尾だけはっきり写っているものもあり，なかには横腹を写したものもあった。それらを詳細に検討した結果，ベイツは，1904年になって，やっとピロウラス・ジャックは Risso's Dolphin（ハナゴンドウ）であるとの結論を出した。

だが，ベイツは，この結論に確信をもっていたわけではない。頭の形，口，背びれ，尾の輪郭などの特徴は，確かにハナゴンドウだった。ただ，からだの色だけが，あいかわらず釈然としなかったのである。ハナゴンドウの体色は，一般に暗灰色とされていた。だが，ピロウラス・ジャックを見た人は，体色に関するかぎり，〝白〟またはそれに近い色という点で，意見が一致していた。そこでベイツが考えたのは，ピロウラス・ジャックは『白鯨』のモビィ・ディックのように白変種ではないかということだった。

しかし，この疑問も，まもなく解消するときがきた。多数の文献を当たった結果，ハナゴンドウは，体色が〝灰色〟で，年をとるにつれて白くなることがあるとわかったのである。さらにこのゴンドウはからだにたくさんのかき傷がつき，そのために白い乱雑な筋がついていることもわかった。この傷は，ハナゴンドウがイカを好むため，イカの鋭いくちばしでつけられるのではないかといわれている。日本人はこの白い引っかき傷を松葉や花に見たてた。そのため，日本では，このゴンドウをマツバイルカと呼ぶことがある。ハナゴンドウという名まえも〝花巨頭〟という字があてられる。つまりハナゴンドウとは，からだに花模様を散らした大頭という意味からつけられた。

魚類または哺乳類

ベイツによる種名の確定と同時に，ニュージーランド総督プランキットは，この問題を諮問委員会にはかった。その結果，またもひとつ，やっかいなことが判明した。

つまり，もし総督がピロウラス・ジャックを法的に保護するとすれば，漁労法を適用するしかなかった。だが，漁労法を援用して漁獲を禁止できる対象は〝魚〟に限られていた。ところがピロウラス・ジャックは魚ではなく，哺乳類だったから，当然，漁労法は適用できないことになった。だが，委員会は，思いきって苦肉の策をとった。ピロウラス・ジャックを〝魚類または哺乳類〟という表現で保護対象とすることにしたのである。

そして1904年９月26日，ついに，次のような総督令が布告された。

1894年の漁労法第５条の規定に基づき，総督はときに応じ，当該植民地全土および，関連水域において，一定期間，特定魚類の捕獲を禁止する法令を制定し，これに違反した者に罰金刑を課すことができる。（中略）

それゆえ，ニュージーランド総督は，ここに，その与えられた権限により，立法委員会会議の勧告と同意を得て，次の法令を布告する。

法　令

１　本法令の布告公示日よりむこう５年間，一般にハナゴンドウ（学名 *Grampus griseus*）として知られる魚類または哺乳類を，クック海峡およびこれに関連した湾，入り江，ならびに付属河川の河口水域で捕獲してはならない。

２　本法令の違反者には，５ポンド以上，100ポンド以下の罰金を課す。

1904年９月26日

ニュージーランド総督

プランキット（署名）

この法令は，もし裁判所で正式に争えば，無効になったであろう。ハナゴンドウはあくまでも魚ではなかったからである。また，前述のように，漁労法で哺乳類の捕獲を禁止することはできず，総督には，その権限もなかったからだった。いわばこれは越権行為であり，法の不正適用であった。だが，1900年代の初期に，それだけの情熱を傾けて，動物を保護しようとしたことは，特筆に値するできごとというべきである。

こうして，ピロウラス・ジャックは世界ではじめて，法律で守られたイルカとなった。この法令が制定されたとき，ピロウラス・ジャックは，すでに船とともに15年間も，人びとに親しまれていた。そして，その後，ジャックが最後に姿を消すまで，この法令は２度更新された。

海の名士

ピロウラス・ジャックが法律で保護されるようになったというニュースは，たちまち，世界の各地へひろまった。そしてさまざまの新聞や雑誌がジャックのニュースを伝え，地方紙のなかには，〝名士〟欄をジャックのためにさき，ピロウラス・ジャックの動静や近況を逐一伝えるものもあった。

同時に，各地からジャックの姿を見ようと，多くの人がやってきた。

1910年３月に，古い汽船マポウリカ丸でクック海峡を通ったＣ．ブレア夫人は，ピロウラス・ジャックを実際に見たときの模様を，次のように書き残している。

〝いっしょに甲板にいた人が，ほら！　ピロウラス・ジャックがくるぞ！　と叫びました。わたしたちは，みんな船の舳先に群らがって，前を見ました。すると，銀白色に輝く大きな魚が，波の間を突きぬけて，わたしたちのほうへ進んでくるのが見えました。しなやかに動くみごとな銀色のからだは，太陽の光を受けて，きらきらと輝いていました……〟

このとき，夫人は夫とともにピロウラス・ジャックを見たが，以前にも，夫人はジャックを見たことがあった。そのとき，ジャックは，夫人が乗っていた船のところへくると，自分のからだを船にすりつけた。そのようすを夫人は，〝ジャ



ックはからだを船の片側へすりつけ，続いて反対側へすりつけました。それからふざけまわるように波にもぐり，また波を突いて空へおどりあがりました〃

と書いている。

ジャックが船にからだをすりつけたということは，ほかにも多くの人が証言している。郵便配達夫の息子ジョージ・ウエバーも，そのひとりである。かれは父親といっしょに，ボートで海へ出ていて，ピロウラス・ジャックに会った。

ふたりが乗って出たボートは，長さが4メートルぐらいだった。ジャックはこのボートに近づいてくると，ときどき下からすごい勢いでボートを突きあげた。

「それ。オールで押し離せ！」

父親はいつもそう叫んだ。ジャックはボートと同じくらいの大きさがあった。だからそのからだでボートにからだをすりつけたり，突きあげたりされると，いつボートが転覆するかわからなかった。

ネルソン航路のベテラン船長 R. J. ヘイも，ピロウラス・ジャックが船にからだをすりつけるのを，たびたび見た。ジャックはいつも船の舳先のあたりを泳ぎまわって，船にからだをすりつけた。そのため，ヘイ船長は，ジャックがからだを船にすりつけるのは，自分のからだのよごれを落とそうとしているのではないかと考えた。

黒い噂

ピロウラス・ジャックには奇妙な習性があった。ある一定区間だけ，船についてまわることは前に書いたが，そのほか，同時に2隻の船が現われると，たいてい，スピードの早いほうへついていった。

当時，クック海峡を航行する船のうちで，パティーナ丸とアラフラ丸が，2基のスクリューをつけていて，15ノットのスピードを出すことができた。そしてこの2隻が，ジャックのお気にいりとなった。ジャックは15ノットで走る船と楽に競走したというが，これはべつに不思議なことではない。15ノットということは，時速約28キロということだが，ハンドウイルカ（バンドウイルカと濁って書く人もいる）はふつう30ノットのスピードが出せるという。ピロウラス・ジャックはハナゴンドウだったが，15ノットぐらいのスピードを出すのは，おそらく楽だったことだろう。実際，15ノットの船の上からジャックを見た人は，〃ジャックがなんの苦もなく〃船についてきたと書いている。





だが，ジャックの〃船えらび〃についてはまったく違う見解をとる人もいた。その人によれば，2隻の船が同時に近づいた場合，ジャックはちょっととまって，ようすを見てから，近いほうへ出かけていったという。また，一度，船のスクリューにひっかけられていらい，スクリューが2基ついた船はいつも避けていたともいう。

さらに，ジャックが近づくのは汽船だけで，ヨットなどには近づかなかったという人もいる。だが，ウエバーの手漕ぎのボートにも近づいているから，汽船だけにしか近づかなかったというのは，誇張のように思われる。

だが，いずれにせよ，ピロウラス・ジャックが船にひんぴんと近づいたことは，まちがいのない事実である。では，ジャックは，なぜ，船に接近したのだろうか。これについては，当時，さまざまの説明が行なわれた。

なかには，ジャックが危険水域を通る船の〃水先案内〃をしたのだという人がいた。そしてこの説明を信じた人は多かった。だが，ちょっと〃科学的〃にものを考える人は，べつの説明をした。その代表的なものは，だいたいふたつに分けられる。ひとつは，ジャックが船のスクリューの音にひきつけられてきたというもの。第2は，ジャックがからだにくっついているフジツボの類をこすり落とすため，船体にからだをすりつけにきたという説明である。

だが，このふたつも，ともに説得力に乏しい。スクリューの音にひきつけられてきたというなら，手漕ぎのボートに泳ぎ寄ったというのがおかしくなる。また，フジツボの類が，ハナゴンドウのからだにつくかどうかということも，あまりはっきりしていない。もしついたとしても，わざわざ船にすり寄る必要はなさそうに思える。海のなかには，からだをすりつける岩など，いくらでもあったからだ。

ピロウラス・ジャックに限らず，イルカの類がときにボートにすり寄ってくるのは，子ども時代に母親に身をすり寄せた楽しい思い出によるという説明をする人もある。だが，むろんこれも，ただの推測にすぎない。そして結局，ピロウラス・ジャックが船につきまとったほんとうの理由は，だれにもわからなかった。

そうこうするうちに，1909年2月12日にペンギン丸が沈没して，75名の乗客が溺死するという事故が発生した。この船は，かつて，ピロウラス・ジャックを銃撃した船だといわれていた。

こうして，ジャックは，人びとから，ますます好奇と畏怖と神秘の目をもって見られるようになっていった。

訃報

1911年3月21日，ニュージーランドの新聞は〃有名な魚〃ピロウラス・ジャックの死を報じた。クック海峡の南島に近いダービル島に，イルカの死骸が打ちあげられたのである。その死骸は色が黒いことを除けば，すべてピロウラス・ジャックにそっくりだった。そこで，さっそくジャックの死が報道されたわけだが，この記事は，パティーナ丸の乗組員によって，たちまち否定されてしまった。船員たちは，いつもと同じように，生きているジャックを海で見たのである。

このあとも，ピロウラス・ジャックは，たびたび〃死んだ〃。そしてそのたびに，人びとのあいだには，まことしやかな噂がささやかれた。なかでも，ショッキングだったのは，1912年4月20日に起こったジャックの〃死〃だった。

この日，ピロウラス湾の沖に，数隻の外国船が停泊していた。それはノルウェーの捕鯨船団だったが，ニュージーランドの人びとにいわせれば，それは〃実に罪深い鬼のような〃人間の集団だった。

たまたま，そのころピロウラス・ジャックの姿が消えた。そこで人びとは，ジャックがノルウェー捕鯨船のえじきになったと考えた。そして人びとは沖に錨をおろしている船団をにらみつけながら悲哀に沈んで，ささやきあった。

「ああ，かわいそうに！　ジャックはあの船の上で切り刻まれ，油をとるために煮られてしまった」

だが，このときのジャックの死も，はっきりした証拠はなかった。

その後いくらもたたずに，ウェリントンの海洋局へ，電報が舞いこんだ。発信者はフレンチ水路の燈台守チャーリー・マーラだった。文面は，ピロウラス・ジャックの死骸を発見したというものだった。マーラはその日，フレンチ水路に灰色の丸太のようなものが浮かんでいるのを発見し，ボートを漕ぎだしてみた。するとまぎれもないピロウラス・ジャックだったので，尾にロープを巻きつけて，岸へ引いて帰り，海洋局へ電報を打ったのだった。

政府は直ちに巡視艇ヒネモア号を現場に急行させた。船にはウェリントン博物館の館長と，海洋局の秘書官がのっていた。現場へ着くと，さっそく死骸の測定が行なわれた。そしていろいろ調べた結果，またもや，その死骸はピロウラス・ジャックではないとの判定がくだされた。

だが，マーラはこの判定にまっこうから反対した。かれは過去4年間，毎日のようにジャックを見てきた。だから自分の目に狂いはないと確信したのだった。しかし，死骸を調べた係員はいった。

「いや違う。色も大きさも，なにもかも違う」

そして死骸はそのまま放置されて腐っていった。

マーラはそれが絶対にピロウラス・ジャックだという信念を変えなかった。それだけに，かれは死骸を腐るにまかせたことを，あとあとまで後悔した。当時，ベルリンやウィーンの博物館では，ピロウラス・ジャックに対して高い値段をつけて，ほしがっていたからである。

このあと，ピロウラス・ジャックの姿を見た者はいない。その死は依然として謎に包まれたままである。そして，そのハナゴンドウが，なぜ24年間も船と戯れつづけたかも，わかっていない。しかしその動物は，まるで蛮地を訪れた宣教師のように，人びとの心に多くの喜びを与え，時の政府は，その〃海からの使者〃を，法を曲げてまで保護しようと真剣な努力を払ったのだった。■

＊　パイロット・ホエールはシオゴトウ（またはシオゴンドウ）をさすこともある。

アマゾン動物記 7　伊沢紘生

ダンタ捕物帳

≪大きな足跡≫

夢を食う動物バク。アマゾンにすむ最大の哺乳動物バク。その野生の姿を実際に見ることは，日本を発つ前，わたしの大きな夢のひとつであった。だからバクのことを現地ではダンタと呼ぶのだと教わったとき，わたしは心のなかで，ダンタ，ダンタと幾度も繰り返しつぶやいたものだった。

アマゾンにきてまずはじめに，わたしたちはプトマヨ河の一支流，カウカヤ川をカヌーでさかのぼり，中流右岸にあった雨漏りのする廃屋をキャンプにして，そこでサルの調査を開始した。

8月11日，わたしは昼過ぎにひとりで森へいき，小1時間歩いて，ふたつの小さい川を横切った。そしてふたつ目の川の向こう側のゆるんだ土の上に，はっきりとしるされた大きな動物の足跡を発見した。それはアフリカで見たカバの足跡と，形も大きさもよく似ていた。

真新しい足跡だった。わたしは胸にきつい動悸を覚えながらしばらくそのあとをつけた。しかし森のなかで足跡を追うことにまだ慣れていなかったため，途中で見失ってしまった。アマゾンの森林にすむカバのような動物，それはダンタにまちがいはないだろうとそのとき思ったが，足跡のスケッチを現地の猟師に見せてそれがダンタだという確証を得たのはそれから1週間もあとのことだった。

それ以後長いこと，わたしたちはサルの調査に適した場所を捜し求めて，プトマヨ河流域のあちこちの森林を歩きまわった。そして，幾度かダンタの足跡に出くわしたが，その姿はどうしても見ることができなかった。ダンタがおもに夜行動するせいにもよるのだろうが，日本で描いたわたしの夢を，ダンタのやつ食べてしまったのではないか，と本気で何回か思ったりもした。ダンタはしだいにわたしにとって幻の動物となっていった。

≪ダンタとの出合い≫

11月24日，ベネージャ川右岸の森林で本調査を開始してから数日たったその日の夕方，助手のホボとヒルベルトの道切りに同行した佐藤君が，森からもどってくるやいなや，

「サルには出合えなかったが，ダンタを見た」

「イヌが4メートルぐらいの幅の川へダンタを追いこみ，ホボらが木のツルをとって投げ縄をつくって首にひっかけ，それを力いっぱいにたぐり寄せて，首のところにマチェテ（山刀）を2回たたきつけた」

「だがダンタはそのツルをたち切って逃げていってしまった」

「つかまえることには失敗したが，その捕物帳はなんともおもしろい見物だった」

と興奮して一気にしゃべった。

「ほんとうにダンタだったのか」

ダンタはわたしにとってあまりに遠い神秘的な存在になっていたため，佐藤君の話をすぐには信じることができなかった。ホボは，「この森にはダンタが多い。きょうのは雄だった」と佐藤君の話につけ加えた。

≪野生のたけだけしさ≫

次の日，わたしはホボらと森へいき，1時間余り歩いて，フサオマキザルの群れに出合った。その少しあと，かれらが連れてきたイヌたちがクビワペッカリーの雄1頭を倒木のほらに追い込んで，ホボが射ち殺した。かれらはその場ですぐに解体作業にとりかかった。やつの皮の裏側に数個，紫色がかった肉腫がついていた。

「こいつは病気持ちだ。食えない！」

ホボは残念そうにいった。

ペッカリーの死体を近くの小川に捨て，また30分ぐらい先へ歩いていったとき，再びイヌたちが猛然と吠えて走っていった。ヒルベルトは「ダンタだ」とわたしに耳うちした。かれらはイヌの鳴き方で，イヌが今どんな動物を追っているのかを正確に識別していた。

サルを調査するものにとって，イヌがいっしょにいるのは決して好ましいことではなかったが，現地人にしてみれば，イヌを伴わないで森のなかを歩くなどということは想像すらできないことだったし，現地人を調査の助手に雇った以上，イヌとの共同生活はいたしかたないことだった。現地人から鉄砲とイヌをとり上げることは，わたしからノートとエンピツと，双眼鏡とカメラをとり上げるにまったくひとしく，それは森歩きを無意味なものにすることだった。

わたしたちはイヌの声の聞こえるほうへ走っていった。木々の幹のあいだを縫い，倒木をまたぎ，ゆるい傾斜を下った先，幅3メートル余りの川が直角に曲がっている，その曲がり角の水の深くなっている所に，1頭のダンタがいた。ダンタはたてがみを逆立て，突きでた鼻を天にむけてブルルルッ……といううなり声を発し，吠えたてるイヌに対峙していた。やつの丸まるとした大きなからだは水にぬれて，つややかな黒光りをたたえていた。動物園で見るバクにくらべて，なんとたけだけしいことか。わたしは夢中でカメラのシャッターを押した。



小川の深みにのがれ
そこで
たてがみをさか立てて
イヌと対峙するバク

ヒルベルトはジャレと呼んでいる強靱なツルをとってイヌをつなぎとめ，昨日同様，マチェテ1本でダンタを捕獲する段どりをはじめた。しかし，イヌをツルでしばっている一瞬のすきに，ダンタはその深みからとび出し，森のなかへ巨大な弾丸のごとく走りこんでいった。またイヌがそのあとを追った。

≪巨大な肉塊≫

5分ほどして，イヌの声は動かなくなり，さらに激しくなった。またダンタを川の深みに追いこんだのだろう。そのとき，銃声がとどろいた。



わたしが見つけた
ダンタの
足跡のスケッチ

小川の澄んだ水を深い紅色に染めながら，ダンタは息が絶えて横たわっていた。真近で見るダンタは，鼻が中途半端に長く，ゾウのできそこないといった感じだった。2頭のイヌはやつの首根っこに襲いかかっていた。オトナの雌であった。ヒルベルトはたてがみをわしづかみにし，その部分をまず切りとった。たてがみの下はわずかに黄色を帯びた白い脂肪のかたまりだった。ダンタのこの脂肪は食用油として，すべての油のなかで最高だという。ホボは，大腿部の肉を切り取り，その赤みのまさったきれいな肉をこぶし大に切ってはイヌに投げてやっていた。肉の色はウマのそれに似ていた。

「ドクトール，この肉を食べるか」

「ダンタの肉はおいしいのだろう」

「ドクトールが食べるなら少し持っていってもいい」

「もちろん食べるとも」

ヒルベルトは反対側の大腿部の肉の一部を薄く切り取った。

「残りはどうするんだ」

「ジャガーを射つためのえさに少し使う」

「その残りは」

「この肉をキャンプまで持って帰るのはたいへんだ。あとは捨てていく」

ホボらはさっさと歩きはじめた。腹いっぱい鮮肉を食ったイヌたちは舌なめずりを打ちながらかれに続いた。まだいくらかの鮮血を流しながら，アマゾンの主のようなダンタは，流れのなかに横たわっていた。

ホボらには，しばらく肉を与えていない自分らのイヌたちに腹いっぱい食わせてやったという満足感があり，うまくいけばジャガーかオセロットを射つことができるという期待感があるのだろうが，わたしは小川に残された巨大な肉塊から，痛いほど，野生動物の無用の殺生の悲しみを感じていた。

このバクは，ブラジルバク *Tapirus terrestris* といい，ふだん1頭だけで歩いているが，配偶関係にある雄と雌，あるいは母と子の，2頭で歩いている場合もときどきあるという。また丸々と太ったからだに似合わず泳ぎの達人で，数百メートルの距離なら，鼻先を水面から出して，一気に泳ぎ切ってしまうという話だが，その現場をみる機会には恵まれなかった。■

モリフクロウ *Strix aluco*

モリフクロウ（フクロウ科フクロウ属）は全長40センチ，体重は平均450グラムだが，雌は700グラムに達するものもある。羽色（うしょく）は淡黄褐色（灰色型）か赤褐色（柿色型）で，褐色やクリーム色の縞と斑点がある。この鳥は頭部が大きく，羽角（うかく）がなく，顔盤はほぼ円形をしており，くちばしが黄色である。また目の虹彩が暗褐色で，目全体が黒っぽく見えるのでほかのフクロウ類からすぐ識別できる。雄と雌は，雌のほうがからだが大きいだけで，羽色による差異はない。幼鳥は灰褐色で深いうぶ毛におおわれている。

この鳥は，ユーラシア大陸の温帯に広く分布している。その分布域はスカンジナビア半島北半分，アイスランド，アイルランドを除くヨーロッパ全域からイラン，カスピ海沿岸地方までと，北アフリカ，それにヒマラヤから中国，朝鮮，台湾にまで分布している。しかし，シベリア，モンゴル，沿海州，日本などには生息していない。ヨーロッパではごくふつうに見られるが，アジアではさほど珍しいとはいえないまでも，あまり数の多い鳥ではないようだ。

モリフクロウはその名のとおり，森林，とくに広葉樹の林，公園，大庭園などを好み，留鳥（りゅうちょう）で，１年を通じてだいたい同じ場所に定住している。この鳥はあちこち出歩くのがきらいらしく，隠れ家や営巣（えいそう）に利用できる大きな古木が残っていて，１年を通じて最低限のえさが確保できる場所であれば，都市のまん中でも腰をすえてしまう。とはいっても，よく茂った林，とくに幹にツタなどがからみついた古いナラ類の林などが，もっとも気に入るようである。針葉樹の林は空洞が少ないのであまり好まない。空洞のほか，岩壁の裂けめ，古壁の割れめなども隠れ家とするが，あまり野性的な鳥ではないので，古い納屋などに巣をつくることも珍しくはない。

この鳥は，池や小川のほとりに定住場所を定めることが多い。そこにはこの鳥の好物のえさがいろいろあるし，水浴びもできるからである。モリフクロウは水浴びが大好きである。雨が降りはじめると大喜びで雨を浴び，羽毛（うもう）が水で重くなって飛べなくなるほどびしょぬれになっている。

こんなときは，巣の入り口の前で，つばさをだらりとたらしたまま，日にあたりながらからだをかわかさなければならない。こんなとき，もし夜はこの鳥から追いかけまわされているスズメたちに見つかろうものなら，このときとばかり，よってたかっていじめられてしまう。

モリフクロウの鳴き声は明るくよく響きわたり，四季を通じて夜の森のなかにこだまする。秋には雄の「ホー，ホー，ホー」という声だけがしきりに聞こえているが，11月になると，雌がそれに「ホッ，ホッ，ホッ，ホッ」とこたえはじめる。たがいにつがいの相手を求める声である。そして，２月ころまでにはつがいが決まるようである。産卵が始まると鳴き声は少なくなり，ひなが巣にいるころがいちばんおとなしい。

この鳥は，ときどき表情をがらりと変える。顔の上のほうの羽毛を立て，下のほうの羽毛を目が隠れるくらい下げると，非常にこっけいな怒ったような表情になる。また，片方の目だけを閉じることができる。それはこの鳥の気持とは関係ないだろうが，人間には《悪いことをして申しわけないですな》というような表情に見える。

モリフクロウは完全に夜行性で，昼間は暗い隠れ家のなかで，両目を閉じてうつらうつら居眠りしながら過ごしている。

日が沈んで30分ほどたち，あたりがとっぷりと暗闇につつまれるころから，狩りが始まる。地面から２メートルぐらいの高さを，音を立てずに飛び，ときどき休んだり，「キィー」と鋭く鳴いて自分の存在を宣言しながら，明けがたまで精力的に活動する。茂みの手前まで飛んでからつばさを激しく羽ばたいて空中に停止し，つばさで茂みの葉をばたばたとた



モリフクロウ。フクロウ科フクロウ属。
完全な夜行性の鳥。
広葉樹の林，公園，大庭園などを好み
１年を通じてほぼ同じ場所に定住する留鳥。
PH. J. MARKHAM



たいて眠っている小鳥を追いたてて狩りをすることもある。

木の上でコガネムシやケムシなどを食べることもあるが，地上で小型の哺乳(ほにゅう)動物，とりわけハタネズミなどを捕えて主食とする。しかし都市にすんでいるモリフクロウは，小鳥がえさの90パーセントを占めている。おもにスズメだが，ときにはもっと大きなハト，チョウゲンボウ，フクロウのひななどに襲いかかることもある。それから見つけさえすれば，池や川のカエルや魚，カタツムリ，ナメクジ，ミミズ，ケラ，バッタなどの昆虫（こんちゅう）類など，ほとんど手当たりしだい，えさにする。

このようにモリフクロウのえさはきわめて雑多だが，それは季節や環境によって大きく異なるし，その鳥の個体による好みの違いもかなりあるようだ。また，ペリットのなかにときどき植物性の食べ物が見つかるが，それはおそらく消化を助けるために食べるものらしい。

この鳥の繁殖期は冬から始まる。1，2月には，雄も雌もだんだんと騒がしくなり，「ホー，ホー，ホー」というしわがれた叫び声と，興奮した「ホッ，ホッ，ホッ，ホッ」という笛を吹くような声とが，交互に入り混じって聞こえてくる。これは雨や風のときには中断されるが，かなり寒さのきびしい夜でも繰り返される。

つがいになったことは，きわめて簡単な動作であらわす。雄は相手に，野ネズミなどの贈りものをもってきて，雌がそれを受けとり，そのあとで雌雄がたがいにくちばしで羽毛をととのえあう。これでつがいが成立する。

つがいが決まると，雄はけんめいにテリトリー（なわ張り）を守り，侵略者をだれも入れまいとする。雌はひなを育てるところを捜しもとめる。繁殖する場所は，たいていは大きな木の幹に自然にできた空洞で，しかも多くの場合，前の年に使ったところを利用する。そのほか，幹のくぼみ，キツツキの巣穴，人間がかけた巣箱，さらにタカやカラスの捨てていった古巣なども使うし，岩壁の裂けめ，廃屋や屋根裏や納屋なども格好の巣となる。また，ときには大木の太い枝の上にじかに卵を産んだり，地面の上，木の根の下，古いウサギの穴のなかに巣をつくることもある。

モリフクロウの繁殖期はきわめて長い。ふつうは3月に産卵するが，えさが豊富にありさえすれば早めに，まれには冬のさなかの12月に産卵することもあり，おそいときは4月でも産卵する。

1腹の卵数はふつう2～4個で，1日おき

モリフクロウのえさはまことに雑多。
森林にすむものは野ネズミ，都市にいるものはスズメ目の小鳥を主食としているが
昆虫類，カタツムリ，カエル，小鳥，ナメクジなどほとんどなんでも手当たりしだいだ。
PH. J.-B. BLOSSOM-N. H. P. A.



モリフクロウのつがい。
日中は両眼を閉じてうつらうつらと居眠り。
たいへんに長命な鳥で
野生状態で18歳の老鳥が捕獲されたことがある。
PH. OKAPIA





に1個ずつ産む。卵は白色で少し光沢がある。雌はふつう最初の卵を産み落とすとすぐ巣につき、雌だけで28～30日間抱卵(ほうらん)する。雌は孵化してからもひなのからだを暖めるため、さらに2，3週間は巣に残っている。巣にいる間，雌は排出するときと，雄が毎晩とどけてくれるえさを受けとるときだけしか，巣を離れない。

ひなは，数日の間をおいて次々とかえるが，全身を白いうぶ毛に包まれている。ひなは5週間近く巣のなかで育てられる。しかし2週間もすると，幼鳥の羽毛はたがいにからだを寄せあってさえいれば寒さに耐えられるようになる。そうなると雌も，夜はひなを養う雄の手助けをするようになるし，昼は巣の入り口で張り番をする。

幼鳥たちはすさまじい食欲を示し，たえずえさを求める。えさがじゅうぶんに手にはいらず，この食欲をしずめることができなくなると，親鳥は先に生まれてきた，よりたくましいひなからえさを与えていく。だからえさの少ない年には，あとから生まれてきたひよわなひなは飢え死にしてしまうことがよくある。いよいよえさが欠乏してくると，餓死したひなまで食べるが，それでもともかく最低1羽のひなだけは成鳥になるようである。

モリフクロウは1年に1回しか繁殖しない。なんらかの理由で卵が失われてしまったときでも，埋めあわせることはほとんどしない。このように繁殖力がきわめて弱い鳥なので，種族の維持は，この鳥がもっぱら長命であることによってようやくささえられている。野生状態で18歳のモリフクロウがつかまったことがある。

ひなたちは4週間ほどすると胸のむかむかするようなごみためみたいな巣の外へ出ようとしはじめる。地上に巣があれば，まわりをよちよちと歩きまわり，危険が迫れば巣に逃げこめばいい。しかし巣が高い位置にあると，このころのひなはよく地面に落ちてしまう。こんなとき母鳥は，どんな外敵が現われても，それがたとえ人間であっても，ためらわず飛びでてきてけんめいに助けようとするのだが，それでも止まり木にもどれないひなもある。そんなひなは死ぬこともある。しかしひなはかなり早く飛べるようになる。飛べるようになると，親鳥といっしょに夜の狩りに出かけていく。

ほんとうにひとり立ちするのは巣を離れるようになってから2か月半ないし3か月はかかる。しかしこのころでも，幼鳥が捕えられる獲物は限られているので，ネズミ類が捕えられるようになるまで，昆虫類がじゅうぶんいないと，飢え死にの危険がたえずつきまとうことになる。

ひなが独立するころになると，成鳥たちは

モリフクロウの巣とひな。
フクロウの仲間は生きた動物しか食べないが
ひなを育てるときにはえさをためこんでおく。
いよいよ欠乏してくると
骨肉相食むことにもなる。(下)

PH. A. FATRAS

フクロウのひな。フクロウ科フクロウ属。
自然の空洞がフクロウの巣となる。
胸がむかつくような悪臭のなかでも
ひなたちはけろりとしている。(上)

撮影　吉野　信

単独生活にもどり、雄は「ここは自分のテリトリーだぞ」と宣言して鳴きはじめる。幼鳥たちは自分自身のテリトリーを捜しに出発しなければならない。秋になると、テリトリーを求める幼鳥たちの移動が始まり、ときには生まれたところから数百キロも離れたところに落ちつくことがあるという。

この遠い移住の試練に耐え、やがてくる冬のきびしさをも、この種に授けられている驚くべき生命力によって耐えぬいたモリフクロウだけが、生き残るのである。

フクロウ *Strix uralensis*

フクロウ（フクロウ科フクロウ属）は、モリフクロウよりはるかに大きく、全長は47〜58センチ、体重1300グラムもあって、これはモリフクロウの約2倍の重さである。

顔盤は白っぽく、細かな放射状の黒い縞があり、白と黒の縁どりで囲まれている。羽色は灰褐色で、暗褐色の不明瞭な縞と斑点がある。羽毛はあしゆびのきわまではえている。羽角はなく、虹彩は黒褐色だ。

フクロウはモリフクロウより北方に分布している。ヨーロッパではスカンジナビア半島と東ヨーロッパの一部にすんでいて、その分布域はほぼ亜寒帯の森林に沿ってユーラシア大陸を横切り、沿海州、サハリン、朝鮮、日本にまで達している。中国のスーチョワン（四川）省の山地にとび離れて生息しているものを除けば、日本は繁殖地の南限にあたる。日本では、北海道から九州までの各地で繁殖している。

フクロウは夜間と朝夕の薄明のときに狩りをするが、明るいときでもかなり活動するようである。とりわけ夏の夜の短い地方に分布しているものは、昼間でも獲物を捜すことがある。えさはハタネズミ、トガリネズミ、リス、イタチ、ウサギなどの哺乳動物と各種の鳥類で、ときにはカエルや昆虫類も食べる。

フクロウは森林性の鳥で、大木がうっそうとはえている人けのない森林にすんでいる。森にはえている木の種類にはとくに好みはないようだが、大部分の地方では針葉樹と広葉樹の混交林をおもなすみ場所としている。えさは夜間、森林の周辺の原野や畑に出て捕える。非常に定着性の強い鳥で、一生自分のテリトリーから離れようとはしない。

しかしシベリア地方のフクロウは別で、都市の公園や人家近くの森や林でも繁殖し、森林で繁殖するものも冬にえさがとれなくなると、町のなかまで移動してくるようである。

フクロウの鳴き声は、「ゴロスケ、ホッ、ホッ、ホッ」と聞こえるあの特徴的な声のほかに、ときどき「ギャー」とか「ウォー」という奇声も発する。



フクロウは木の空洞や大型のタカ類が捨てていった巣などに営巣する。産卵に適当な場所が見つかると、そこへ卵をじかに産む。1腹の卵数はふつう2〜4個だが、えさの多い年には5、6個にふえるといわれている。卵は白色で、表面がかなりざらざらしており、モリフクロウの卵に実によく似ている。

産卵はだいたい4月のはじめであるが、食糧事情によって、ときには3月早々、あるいは遅れて5月に産むこともある。一般に北の地方ほど産卵の時期はおそくなる。また食糧事情がとくに悪い年には、まったく産卵しないこともあるらしい。

雌は1、2日の間隔をおいて卵を産み、最初の卵を産むとすぐ抱卵を始める。抱卵期間は約27〜29日間で、この間は雄が雌のためにえさを運んでくる。雄はときおり巣のなかまではいりこむが、雌と交替して抱卵をすることはないらしい。

ひながかえってからしばらくの間は、雄がひなのえさを捜してはとどけ、雌がそれを受けとってひなたちに分け与える。ひなは1か月ぐらいすると巣から出られるようになり、5か月ほどではじめて飛べるようになり、6か月で換羽（かんう）が始まる。

カラフトフクロウ *Strix nebulosa*

カラフトフクロウ（フクロウ科フクロウ属）は、フクロウよりほっそりしているが、フクロウ属の仲間のなかではいちばん大きい。全長65センチほどでほぼワシミミズクに匹敵する大きさだが、体重は雌で1000〜1200グラムぐらいで、ほぼフクロウと同じである。つばさの開張は140センチほどもある。

この鳥は顔に特徴がある。顔盤は灰白色に暗褐色の同心円状の模様がある。羽色は淡灰褐色で、暗褐色の縞や斑がある。羽角はない。虹彩は黄色だ。

カラフトフクロウは典型的なタイガ（針葉樹林帯）の鳥である。北方に分布する鳥だが、ツンドラ地方には生息せず、森林限界が分布の北限となっている。ラプランド地方、フィンランドからベーリング海にいたる地域（シベリアのタイガがその中心となる）で、アラスカ、カナダ、ロッキー山脈など北アメリカ大陸側にも分布する。

留鳥だがときどき移動し、サハリンで冬に捕獲されたことがある。日本ではまだ知られていない

このフクロウは、シロフクロウと並んでヨーロッパにすむフクロウ類のなかではもっと

どんらんにえさをねだりつづけるひなに
フクロウの雄は必死になって獲物を運ぶ。
フクロウは夜間はもちろんのこと
明るい時間にもかなり活動するようである。
撮影 吉野 [illegible]



オオフクロウ。フクロウ科フクロウ属。
インド，セイロン，インドシナ半島，マレー半島
ボルネオと東南アジアにすむ大型のフクロウ。
無気味な鳴き声と音もなく飛ぶ姿から
現地の人びとは悪魔と恐れている。
PH. LARIVIÈRE

95－6

アメリカフクロウ *Strix varia* 。
フクロウ科フクロウ属。
モリフクロウの近縁種で
北アメリカとメキシコに分布。
リス類がかれらの主食。（右）
PH. S. GROSSMAN-HOLMÈS-LEBEL





キンメフクロウ。フクロウ科キンメフクロウ属。
美しい橙黄色の虹彩は、その名にふさわしい。
ヨーロッパではイタリア人がつけたという
《頭でっかちのフクロウ》という名で知られる。
おとなしくて人を恐れない鳥。（上）
PH. A. CHRISTIANSEN

も珍しい種である。北極圏に近い森林、泥炭地、荒地にいて、暗闇を捜して生きている。しかしこの地方では、夏の間は日が沈まぬ白夜の世界だから、光の世界になれないわけにはいかない。それでもこの鳥は、もっとも暗くなったときしか活動しない。

地上すれすれに飛んで、獲物に忍びよって捕えるが、その堂々たる大きさに似合わず、きわめて小型の獲物で満足する。実は、からだが大きいのではなく、羽毛が厚く密生していて寒さを防いでいるので、からだはさほど大きくないのに堂々と見えるのである。おもなえさはハタネズミとレミングで、ほかにトガリネズミ、スズメ目の小鳥、ライチョウやエゾライチョウも機会があれば食べる。

この鳥はあまりたけだけしさを感じさせない。夜はこもったような声で「フウッ、フウッ、ホッ」と鳴く。テリトリーに人間があらわれると好奇心をかきたてられるのか、少しも恐れずにじろじろとながめている。巣が脅かされたときには向かってくる場合もあるが、ふつうはおとなしくしている。

この鳥の繁殖についてはまだよく知られていない。ラプランド地方では、針葉樹の高いところにあるノスリ、ミサゴ、ワタリガラスなどの巣を借用して、4月の後半に3～5個の卵を産む。ほかのフクロウ類のように、木の空洞に産卵することはあまりないようだ。

雌は最初の卵を産むとすぐに抱卵にはいるが、抱卵期間はまだはっきりしない。抱卵は雌だけでやるらしい。卵はかなり日をおいて孵化するので、ひなどうしの間でも、生まれた日によって成長するのにかなりの差違があることが確かめられている。ひなは孵化してから30～40日で巣を離れるようになるが、家族は8月までいっしょに生活する。

カラフトフクロウにとって、種の存続はますます困難になろうとしている。この鳥が、きびしい気候の地方で、弱い繁殖力しかもたずに、大型の鳥たちが残していった巣を頼りに繁殖していかねばならないことだけでもたいへんだが、それに加えて、獲物がだんだん少なくなり、森林開発によって繁殖地を追われつつある。この鳥は数がはっきりと少なくなってきており、1964年にスウェーデンの北部で行なった調査では、100キロも離れた場所にわずかふたつの巣を見つけただけだった、という。

オオフクロウ

Strix leptogrammica

オオフクロウ（フクロウ科フクロウ属）は雌で全長約60センチ、東南アジアに分布する大型のフクロウである。背面はだいたい濃いチョコレート褐色で、肩や背中に白色の細かい横斑があり、腹面は淡黄褐色で一面に暗褐色の細かい横斑がある。顔盤は丸く、クリームがかった褐色で、目の周囲が黒い。羽角はなく、虹彩は暗褐色。

このフクロウはモリフクロウと近縁で、インド、セイロンからインドシナ半島、マレー半島、ボルネオまで分布し、中国南部と台湾にもすんでいる。標高ゼロメートルの海岸地方から5000メートルのヒマラヤの深い森林にまで生息し、昼間も活動しているが、姿を見ることは少ない。ふつう4節からなる気味の悪い声で鳴き、まったく音を立てずに飛びまわるので、原住民の多くは悪魔と信じている。

この鳥の繁殖については不明の点が多いが、2個ぐらいの卵を、ほかの鳥の古巣や地上に産むようだ。産卵期はインドでは2～4月ごろ、ときには1月に卵があった例もある。えさは小型の哺乳動物のほか、鳥類、トカゲ、ヘビ、魚なども食べる。

フクロウ属にはモリフクロウ、フクロウ、カラフトフクロウ、オオフクロウのほかに少なくとも8種があり、アメリカやアフリカにも分布している。

キンメフクロウ

Aegolius funereus

キンメフクロウ（フクロウ科キンメフクロウ属）は、イタリア人が命名した《頭でっかちのフクロウ》という名にぴったりの鳥である。全長はほぼ26センチと中型だが、からだに不似合いな大きな頭をもっている。顔盤は丸くて白く、白い斑点のある幅の広い褐色の羽毛で縁どられている。頭部と背面は灰褐色で、円形の小さい白斑が密にあり、腹面は白

トラフズク。フクロウ科トラフズク属。
「いまけえったぞ」
父親が夜の狩りの獲物をくわえてご帰還。
えさは圧倒的に野ネズミ類が多く
ネズミが多い年には2度繁殖することもある。（右）
PH. A. FATRAS

オオフクロウの虹彩は暗褐色をしており
きわめて特異な目つきをしている。
フクロウ類の多くは虹彩が黄色や橙黄色だが
フクロウ属には暗褐色の虹彩の鳥が多い。（95—10）
PH. J. LARIVIERE









雪の上で恐怖にすくみあがっているネズミにフクロウがいままさに襲いかからんとしている。この鳥は森林性で大木がうっそうと茂る森林にテリトリーをかまえ，一部のものを除いて一生を同じテリトリー内で過ごす。

PH. LINDBLAD



く不明瞭な縦斑がある。羽角はない。虹彩は橙黄色をしている。

このフクロウは北半球北部の鳥で、ユーラシア大陸では北部・中部ヨーロッパの樹木の多い山、ソ連の森林地帯、モンゴル、中国の東北部と北部、沿海州、サハリン、カムチャツカなどに生息するが、日本ではまだ捕獲されたことはない。アメリカ大陸北部の森林にもすむ。

留鳥であるが、秋は多少移動する。年によっては秋にデンマーク、イギリス、フランスのプロバンス地方、イタリア北部にまで、突然やってくることがある。おそらく独立したばかりの若鳥であろうが、完全な夜行性のため、じゅうぶんな観察はできていない。

この鳥の分布域は、クマゲラの分布域によって決まってくると主張する人がある。クマゲラが捨てた巣穴をよく利用するからである。しかし、クマゲラの穴がちょうどいいとはいえ、ヨーロッパアオゲラ、アカゲラ、ミユビゲラなどの巣を使うこともあり、自然の空洞を利用することもある。

選びだした巣穴には何も持ちこまず、前の持ち主が集めておいたくずの上にじかに産卵する。雌は卵が孵化しても巣をきれいにしようとはせず、ひなたちははきだめみたいななかで育てられるが、ひなもいっこうに気にしないらしい。

キンメフクロウはふつう2月ごろつがいとなり、4、5月ごろ繁殖する。1腹の卵数は4、5個がふつうだが、多い年には8個も産むようだ。ほかのフクロウと同じで、雌だけで抱卵する。抱卵期間は26日間ぐらい。その間、雄が給餌する。雄は巣のなかへは、はいらないらしく、えさは巣の入り口か巣のなかへおく。ひなは白いうぶ毛に包まれて生まれてくるが、すぐにチョコレート色の若い羽毛に変わる。ひなは巣のなかで1か月ほど暮らす。

キンメフクロウもハタネズミをはじめネズミ類をよく食べるが、ひなを育てる間は小鳥もたくさん食べる。完全な夜行性のため、日中は針葉樹林の幹に寄りかかり、枝に身を潜めている。極北の夏の間は、光の世界にも多少は慣れなければならないが、しかし生活のリズムを狂わされることはないようだ。人を恐れず、たけだけしさを感じさせない。夜、かなり高い声で「ポッ、ポッ、ポッ」と鳴く。キンメフクロウ属には4種がある。

トラフズクの頭にある淡黄褐色と黒色の羽角は警戒するとき、不安を示すときにピンと立つ。「おい、なんだってオレの写真なんかとるんだ」とでもいいたそうなすごんだ表情。(95—11)

PH. Z. F. A.

ヒメキンメフクロウ *Aegolius acadicus*
フクロウ科キンメフクロウ属。
全長18センチという小型のフクロウで
アメリカ合衆国とカナダに分布し
針葉樹林に好んで生息している。

PH. J. BURTON



コミミズク　*Asio flammeus*

コミミズク（フクロウ科トラフズク属）はきわめて特異な外観をしており，ヨーロッパにいるほかのフクロウ類とは異なっている。全長は約38センチ，体重は平均340～420グラム。雌は雄よりも大きい。顔盤は完全に円形で，白くて黄色がかっている。羽角（うかく）はあるが，その名のとおりたいへん短い。

羽色（うしょく）は淡黄褐色で，暗褐色の斑や縞がある。虹彩は黄色。この鳥も個体による羽色の違いが多く，地色の濃いものと淡いもの，斑の目だつものと目だたないものなどがある。

コミミズクは分布が広いことで有名である。旧北区と北アメリカの大部分，南アメリカの南半分，太平洋とカリブ海のいくつかの島々に分布する。温帯と亜熱帯では留鳥（りゅうちょう）で，亜寒帯で繁殖するものは冬，熱帯地方へ渡る。日本では繁殖しないが，冬，海岸や河原の荒地でよく見かける。

コミミズクはほかのフクロウ類と異なって，樹木の少ない原野，湿地，ツンドラ，ステップ，牧草地，海岸の砂丘などに好んですむ。森林地帯のものも，周辺の野原にすみ，昼間はヨシやイグサなどの茂みに潜んでいる。休むときもふつうは地上で休む。危険が迫ると，ウズラがよくやるように地面に倒れて，敵が





コミミズク。フクロウ科トラフズク属。
フクロウ仲間では変り者で地上性の鳥。
野原や湿地やツンドラにすんで地上に巣をつくり
日中はくさむらで休んでいる。

狩りのやり方も仲間とは違っていて
タカのようにテリトリーの上空を旋回飛行して
獲物を見つけるやいなや
矢のように突っ込んで捕える。（4枚とも）

PH. F. ERIZE

気づかずに通りすぎるのを待つ。最後のどたんばになってはじめて飛びだす。まわりが明るくても、飛ぶのに困ることはないようだ。

この鳥も夜行性だが、ツンドラ地帯では、とくに春には、日中でも姿を見ることがよくある。北極圏では日が長い時期があるので、狩りのやり方も、暗黒のなかだけで獲物を捕えるフクロウ類のやり方とはたいへん異なっている。この鳥は非常に高いところまで飛びあがって、タカのように大きく輪を描いて飛んでいて、それから力をこめてつばさを羽ばたきながらかなりの距離を相当な速度で飛びまわる。こうしてテリトリー（なわ張り）に目を光らせて、突然地面に向かって突っ込んだかと思うと、ネズミをさらっていく。

ハタネズミはこの鳥の主食で、ほかのえさはたまたま気が向けば捕えるぐらいである。トガリネズミ、子ウサギ、地上にすむヒバリやタヒバリなどの小鳥、トカゲ、カエル、ときには昆虫（こんちゅう）類も捕えるが、全体からみればきわめて少ない。

ドイツでウッテンドルファー博士（Uttendoerfer）がこの鳥のペリットを調べたところ、2612個のえさのうち、ネズミ類が2586匹（そのうちハタネズミが2475匹、トガリネズミが4匹、その他107匹）、モグラ2匹、スズメ目の小鳥15羽，昆虫類5匹などであったという。

この鳥は、背丈の低い植物のはえた土地、







野原，牧場，テンサイやジャガイモの畑によく出没して，野ネズミをあさる。この鳥の生活は，野ネズミがいるかいないかで決まってしまう。ときには生まれたところから，はるかに離れた温帯地方にまで移動して，そこにすみついてしまうこともある。

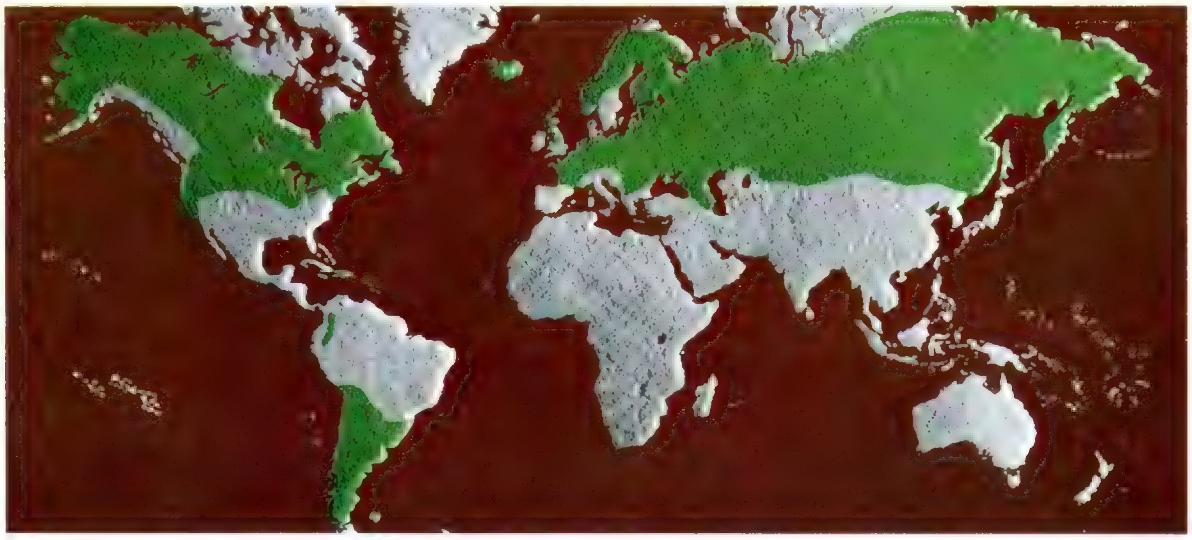
コミミズクの繁殖期は3月から6月までで，繁殖期にはいると，雄は夜も昼もひっきりなしに，とくに薄明時に，「キィー，キィー」と鋭く単調に鳴く。またテリトリーの上を，つばさをひろげ羽ばたきはほとんどしないで輪を描いて飛ぶ。それからすとんと下に落ちたかと思うと5，6回風を切るように羽ばたいて飛びあがり，また輪を描きながら，「ブゥー，ブゥー，ブゥー」と鳴く。この軽妙な動作が，ディスプレーである。

繁殖期や秋には，高空を飛んでいて突然両方のつばさの先端がくっつくぐらいに後ろにのばし，地面に向かって降下する。このとき，遠くで機関銃を撃っているような，あるいはキツツキが木をたたくような音をたてる。ある鳥学者は，この一連の音はつばさがぶつかり合うからだといい，また他の学者はつばさの先端の風切羽（かざきりばね）が振動する音だ，といっている。

コミミズクは原野，湿地のアシなどのくさむらのなかで，地面のくぼみに卵を産む。卵が湿った地面に直接ふれないように，かわいた細い植物の茎を何本か敷く。ときには材料を集めてかなり本格的な巣をつくることもある。こうした営巣（えいそう）は，フクロウ類ではこの鳥だけである。それでも，ほかの鳥の巣から見れば，きわめておそまつなものである。

1腹の卵数はふつう4～8個だが，多い年には14個も産むことがある。産卵は1日おきで，雌は最初の卵を産むとすぐ抱卵（ほうらん）にはいる。卵は白色無斑で表面がざらざらしている。雌だけが抱卵し，25～28日で孵化するが，1，2日ずつの間隔をおくので，全部が孵化するには1週間以上かかる。地上に営巣するこのフクロウのひなは，成長が早い。12～17日ほどで巣を離れ，くさむらのなかに隠れてすみ，1か月ぐらいで飛べるようになる。幼鳥は夏になるとあちこち飛びあるきはじめ，ときには生まれたところから1500キロも離れた土地で見つかったこともある。

本格的な渡りは9～11月ごろである。渡りは，気候の条件よりも，むしろえさの状況に



コミミズクは分布のきわめて広い鳥である。その分布地域は，ユーラシア大陸の北部と中部のほぼ全域，北アメリカ大陸の北部，南アメリカ大陸の南部，さらに太平洋やカリブ海のいくつかの島にまで分布している。

冬枯れの水田でネズミをあさるコミミズク。かれらはひと晩に平均4匹のネズミ類を食べる。農業や林業をやる人間には得がたい協力者だ。日本では繁殖しないが，冬に見られる。（上）
撮影　吉野　信



逃げようか、それとも襲いかかろうか
羽角をたて、つばさを大きくひろげて
片目を半分閉じて
緊張の極点にいるトラフズク

PH. J. BURTON

95－17



よって左右される。えさがじゅうぶんであれば，定住してその地できびしい冬も耐えぬくが，えさが少ない年にはスーダン，ケニアにまで渡っていくものもある。コミミズクの渡りがこのように不規則で，渡りとネズミの繁殖とのあいだにはっきりした関係があることから，この鳥の渡りは季節的なものというより，食糧事情による傾向が強いといえる。この鳥はまた，2月から5月になっても，秋に去った土地へは必ずしももどってこない。

トラフズクの目は
あらゆる夜行性の動物と同じように
きわめて微弱な光でもよく見える。
日中，虹彩は収縮するが物はよく見える。
しかし，まったく光のない世界では何も見えない。
PHOTO C. CHANTELAT

トラフズク　*Asio otus*

トラフズク（フクロウ科トラフズク属）は全長およそ36センチ，つばさの開張は約90センチで，体重は280グラムくらいである。からだの背面は灰褐色で，濃い褐色の斑や縞があり，腹面は淡黄褐色に褐色の縦斑（じゅうはん）がある。顔盤はほぼまん丸で白っぽく，暗褐色の羽毛（うもう）で縁どりされている。外観はコミミズクに似ているが，羽角の長いことで容易に区別される。虹彩はふつう橙黄色（とうこうしょく）である。あしゆびのきわまで羽毛におおわれている。

トラフズクは主としてユーラシア大陸と北アメリカ大陸の温帯から亜寒帯にかけて生息している。ヨーロッパではスカンジナビア半島の北半分を除く全域にすみ，北アフリカやアゾレス諸島にも分布している。日本では北海道から本州の中部地方までの地域で繁殖するほか，冬期には各地の山麓（さんろく）や村落などに現われる。

一般には定着性の強い鳥だが，冬には多少えさの多いところへ移動するようである。またごく北のほうのものは，コミミズクのように渡りをする。この鳥の日本での繁殖例は珍しく，ふつうに見かけるのは北から越冬のために渡ってきたもののようだ。

トラフズクはコミミズクと違ってまったく森林性の鳥である。広葉樹林にもすむが，ハリモミやトドマツを中心とする針葉樹林にたくさんいる。一般には平地の鳥で，奥深い山岳地帯ではずっと数が少ない。また，ほかのフクロウ類と異なって，都市のなかにすんでいるということもあまりない。

このフクロウはほぼ完全に夜行性で，極度に用心深く，人間の目にふれる機会はあまりない。日中は大きな針葉樹の枝にじっと身動きもせず，ほとんど棒のように垂直の姿勢のまま，両眼を半ば閉じて，顔をしかめて，木の葉のなかに巧みに身を隠してまどろんでいる。危険が迫るのをいち早く察知しても，飛びたたず，羽毛をからだにぴたりとつけて，身動きせずに木の枝か何かのようにじっとしている。この擬態（ぎたい）によって，多くの外敵からのがれているが，羽毛がすばらしいカムフラージュになっているからだ。

夜になると狩りを始め，夜明けには巣に舞いもどり，そこでペリットを吐きだす。ペリットは木の根元に積みかさなっており，この鳥を見つけるときにはよい目じるしになる。トラフズクは，もっぱらネズミ類を食べるが，とくにハタネズミがずばぬけて多い。ウッテンドルファー博士は，5万7424個のペリットのうち，ネズミ類5万2480匹（そのうちハタネズミ4万3847匹，トガリネズミ241匹），鳥類が4673羽（スズメがいちばん多い）という結果を報告している。あとは子ウサギが22匹，モグラ39匹，コウモリ14匹，イタチ8匹，カエル10匹，昆虫類176匹，トカゲ1匹，魚1匹であったという。

この鳥はひと晩にネズミ類を4匹も食べるので，農業や林業をする人びとにはとりわけ貢献しているわけである。

トラフズクはほかのフクロウ類と違って，



何羽かの仲間が集まっていることが多い。夜は決まって単独で狩りをするが、繁殖期以外は、昼間は好んで仲間たちと群れをつくっている。小さな森、公園、村落の近くで、5、6羽、ときにはそれ以上の群れを見ることは珍しくない。

繁殖は、ときには1月から始まることもあるが、だいたいは2月か3月からである。森のなかに「ウゥー、ウゥー、ウゥ」という雄の重々しい鳴き声が響き、それに雌のもっと鋭い、嘆くような感じの叫びがこたえる。それから雄と雌は針葉樹の枝のあいだをジグザグに飛びながら求愛し、つがいになるとすぐ、巣を捜しにかかる。卵はキツツキの巣穴や自然の空洞(くうどう)に産むこともあるが、ふつうはタカやカラスやリスが捨てた古い巣のなかに産む。また、木の根元の地面にじかに産むこともよくある。巣の場所が決まると、雌はこれに何ひとつ新しくつけ加えることもなく、卵を産みこむ。

最初の卵を産むとすぐ抱卵を始める。卵はだいたい3月か4月のはじめまでに産みおわる。卵は丸くて白く、多少の光沢がある。1腹の卵数はふつう4、5個だが、9個も産んだ例がある。

ネズミ類が並みはずれてたくさんいる年には、トラフズクは2回めの繁殖をすることもあるようだが、ふつうは年1回だけだ。一方、えさが少ないと、巣立つひなの数はごく少ないか、あるいは、まったく繁殖しないこともある。

最初の産卵から27、28日たつと孵化が始まる。雌が抱卵している間じゅう、雄はえさを運びつづけ、ひながかえるとその活動はいっそう盛んになり、日が沈まないうちから獲物を狩りはじめる。

ひながかえってから2週間というものは、雌はほとんど巣を離れない。しかしこの時期が過ぎると、雌も雄の仕事を助けてえさをとりに出かける。3週間たつと幼鳥は巣を出て、枝の上にとまる。母鳥はひなをたえず見張っているが、もしひなのうちの1羽が止まり木から落ちそうになり、つめやくちばしや小さくて短いつばさを使って、やっとこさっとこ登ってくるようなときでも、これを助けようとはしない。しかし、もし何者かが侵入してくれば、いつもひなの近くにいる親鳥たちが、たちまちのうちに駆けつけて威嚇(いかく)して追いはらってしまう。

7、8月になり幼鳥が3か月ほどたったころ、家族は離ればなれになる。この鳥の移動については、まだよくわかっていないが、あるものは確かに留鳥であり、ほかのものは多少の移動をするようであり、北のほうで繁殖したものは渡りをする。

9月から11月にかけて、たくさんのトラフズクがより豊かなえさを求めて、南の地方へ渡っていく。脚環(あしわ)をつけた鳥を捕えたところ2000キロ以上も渡りをしたことが確かめられた例もある。

トラフズクのひな
かれらのマイホームは
タカやリスやカラスなどが使い古した巣穴だ。
育つひなの数は
ネズミが多いか少ないかに左右される。
PH. BILLE



ウォルター（Walter）というナチュラリストは、19世紀、飼育していたトラフズクについておもしろい観察をしている。このトラフズクは、飼育の条件にたいへんよく適応したという。

「昼ごろ、太陽の光がかごのなかにさし込むと、わたしのトラフズクは両眼を開き、頭をあげ、つばさを開き、毛をひろげて、光を胸にあてる。それから太陽の光にもっとよくあたろうとしてか、あちこちと歩きまわった」

「クリスマスツリーを飾るのは、わが家のたいへん楽しい行事のひとつであったが、わたしのトラフズクもこれに加わった。トラフズクは、目をじっとすえ、身動きもしないで、長い間ツリーを見つめていた。トラフズクは、ロウソクのまたたく光を、太陽の光と思いこんでいるらしかった。

太陽の光が気持よくさし込む午後1時ころ、トラフズクを観察していると、この鳥が天井のほうへ目を向けたのを見た。そこにはハエより大きいクモが動いており、網を張ろうとしていた。クモが動きを止めると、トラフズクは興味を失うが、クモがまた動きはじめると、じっとまた見つめるのであった」

「まっ暗だと、トラフズクはまったく目が見えない。この鳥がかごから出られるようにしてやると、石油ランプのほうへ飛んでいって、消してしまった。そして壁にぶつかりながら、部屋じゅうを飛びまわった。しかしついには床に落ちてしまい、起きあがらずに、わたしがランプをつけるまで床の上で身動きもしないでいた」

「部屋のなかでトラフズクを自由にしてやると、頭をあちこちと動かしたり、からだを左右に傾けて喜んでいるようすを見せた。どんなものでもいたずらの種になった。ハンカチやナプキン、小さいクロスなどを取ると、これらを家具の下へあしで押しこんで隠そうとした。この仕事にトラフズクはすっかり夢中になってしまった。

しかしわたしが紙を丸めてやると、これを飛びながらつめでしっかりとつかんだ。どこかへとまる前に、トラフズクは、たまたまひとつの紙の玉をつかんだ。このときは紙玉をつかんでいてどこにもとまれないので、長い間飛んでいた。このトラフズクはまた、食べ残したごちそうを、部屋の暗い片すみに運んでくちばしで隠してしまう、という習性をもっていた」

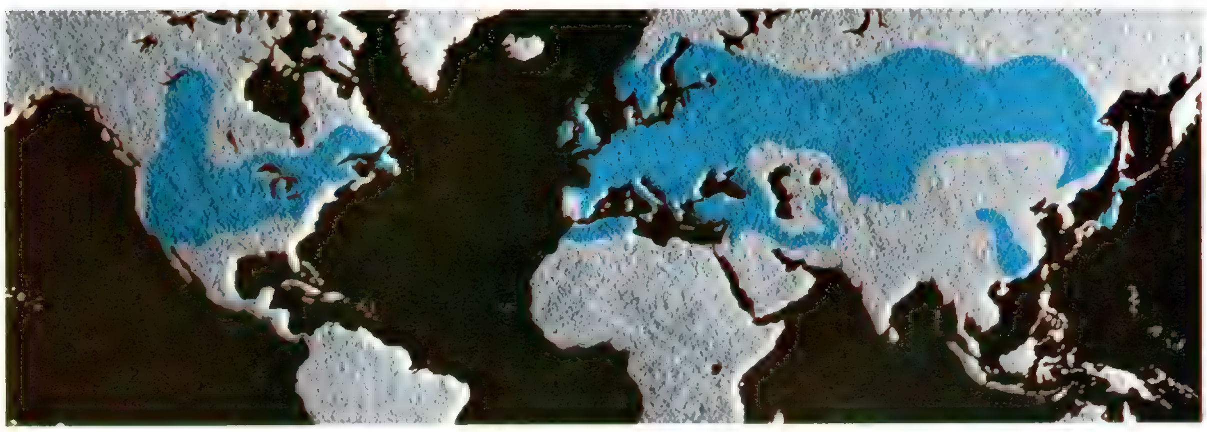
「もし、かごの底に新しい砂を敷いてやると、トラフズクは止まり木からおりて、砂をいろいろに調べながら歩きまわる。それからネズミに襲いかかるときのような格好をして、両あしですばやく砂をかきたてる。かごのなかの楼をわたしがもとにもどそうとすると、トラフズクはあしでわたしの手助けをしようとするのだった。しかしこれはたいへんな迷惑である。手伝いをやめさせようとしてもなかなかやめようとしないし、熱心さのあまり、わたしの手にけがをさせそうな勢いだったからである」

「2歳になった春、わたしのトラフズクは繁殖期の鳥類に独特の興奮状態を示すようになった。この間というものは、とくにわたしの妻が姿をみせると興奮し、ついにはわたしに嫉妬するほどであった。どうして、人間の女性に、異性というものを感じとったのか、いまでもわたしにはわからない。

妻がトラフズクのいる部屋へはいると、かれは止まり木からさっと飛びおり、羽角を下げて子ヒツジの心臓のひときれをくわえて、女主人にさし出すのだった。えさが非常に新鮮なときには、妻はトラフズクを喜ばせようとしてかごに頭を近づけてやると、かれは妻のくちびるの上に心臓のひときれを押しつけてくるのだった」

トラフズク属には約6種が属しており、世界的に広く分布している。

ほかのフクロウ類と同じく、トラフズクも、有害なネズミ類と戦う人間から、得がたい協力者であることを認められるようになり、いまでは世界各国で、法律によって保護されている。



トラフズクの分布域は
北緯66度以南のヨーロッパのほぼ全域と
アジア中央部と
カナダ、アメリカ合衆国などである。

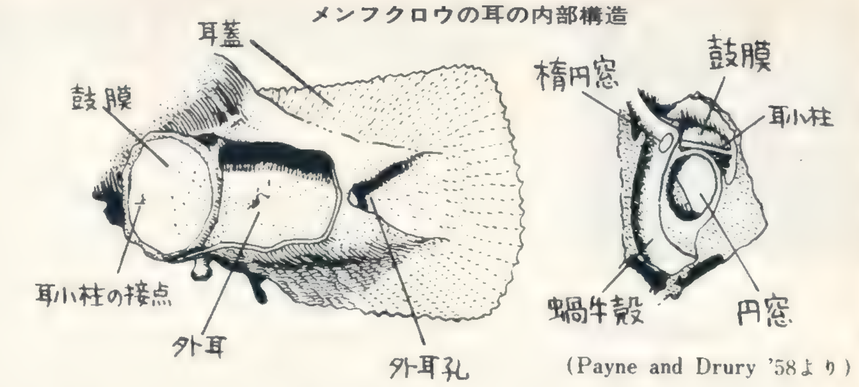
抱卵中のトラフズクの雌
[illegible]は妻と愛児のためにせっせとえさを運び
妻はほとんど巣を離れずに愛児をいつくしむ。
[illegible]愛に脱帽！
PIERRE ETIENNE [illegible]

フクロウ類の聴覚

樋口広芳

フクロウ類の感覚器官は、夜行性・肉食性の生活様式と結びついて、他の鳥には見られないさまざまの特徴を備えている。この点を再確認し、さらに深化させるため、とくに聴覚を中心に、アメリカのペイン、ドルーリ両博士が1956年以来行なっている研究をもとに、まとめていただいた。なお両博士の研究の骨子は『Natural History』誌1958年6,7月号に掲載されている。（編集部）

メンフクロウの耳の内部構造



(Payne and Drury '58より)

フクロウといえばだれもが思い浮かべるのが、あの大きな目。暗がりのなかでかっと見開いた目は、いかにもよく見えそうだが、実際、その構造においても、夜行性の鳥にふさわしいさまざまの特徴を備えている。

まず、外から見てもわかるように、角膜が外部に広く突出しており、水晶体は大きくて長い。したがって、目にはいってくる光の量が多く、網膜には鮮明な像が映ることになる。この構造では、像の大きさが相対的に小さくなる欠点があるが、これは目全体が大きいことで補われる。また、網膜の摂受体のほとんどは弱い光を感ずるロッド細胞（桿状体）からなっているし、虹彩は照度の変化に敏感に反応する。目の位置は、他の多くの鳥とは違って頭部の前面にあり、このため両眼視（立体視）できる視野が広く、対象物までの距離を正しく感知することができる。さらに、目を中心としてくぼんだハート形の顔盤は、光を集めるフードの役割を果たしている。

以上のようなすぐれた特徴によって、フクロウ類は星明かりのもとでも、人間が満月のときに見るのと同程度の的確さで物を見定めることができる。だが、いくら目がよいといっても限界はある。ダイス（1945）の実験によれば、メンフクロウ、トラフズク、ヨコジマフクロウは、0.00000073ルクスまでは物体を見分けることができたが、0.00000053ルクスではだめであった。この結果に従えば、これらのフクロウ類は、ひどい曇天の夜ばかりではなく、晴れた夜でも樹木などによって地上に落ちる光の量が大きく減殺されてしまう林のなかなどでは、獲物をはっきり見ることはできないことになる。後者の場合には、開けた障害物のないところの50分の1から200分の1ほどの明るさしかないからである。

では、そのように視覚がじゅうぶんに働かない場合、フクロウ類はどのようにしてえさをとっているのであろうか。

耳の構造

夜行性のフクロウ類でもうひとつ顕著な適応を見せているのが、その聴覚である。まず、耳の外観から見てみよう。かれらの両耳は、頭が大きく幅広いので、ふつうの鳥の場合よりもずっと離れた位置にある。このため、音波がそれぞれの耳にはいってくる時間の差が増し、音源の方向をより正しく感じとることができる。また、目を中心にしてくぼんだ大きな顔盤は、半開きの扉のように、集音の効果をも果たしている。さらに、多くのフクロウ類の耳はいくつかの点で左右不相称になっており、これも、音が両耳にはいってくる時間の差を大きくし、音源までの距離や方向を正しく感知するのに役だっている。たとえば、メンフクロウでは耳孔をおおうヒレ状の耳蓋（じがい）が右よりも左のほうで少し高い位置についているし、キンメフクロウでは左右の耳の骨格が異なっており、外耳孔の大きさにもわずかながら、相違が見られるのである。

次に、耳内部を見てみると、まず、かれらの鼓膜が他のほとんどの鳥にくらべて非常に大きいのに気がつく。これは音波を受ける振動膜の表面が広いことなので、他の鳥よりも小さな音を敏感に受けとることができる。さらに、その奥の中耳では、鼓膜の振動を伝える耳小柱――これは哺乳（ほにゅう）類のつち骨、きぬた骨、あぶみ骨という3つの耳小骨に相当する――が、他の鳥では鼓膜の中央に接しているのに、フクロウ類では中心をはずれてついている。このため、末端が頭骨に付着した鼓膜が音波によって内側にふくらまされるとき、てこの原理によって、中央部についている場合よりも強い力を加えられることになり、弱い音でも内部に伝えることができるのだ。

一方、耳小柱は楕円窓（だえんそう）というところで蝸牛殻（かぎゅうかく）に接しており、その内部のリンパ液に対してピストンの役割を果たしている。音波を受けると、耳小柱はリンパ液に圧力を加え、これが蝸牛殻内部にある薄い膜を振動させて神経末端を刺激し、電気的な衝撃となって脳に送られていく。ところで、蝸牛殻は一方の端が閉じた厚い管なので、そのままでは耳小柱がリンパ液に圧力を加えても、液は流動することができず、薄膜を振動させることもできない。つまり、圧力の抜け道が必要なのである。このため蝸牛殻の一部は伸縮性のある薄い膜だけでできていて――この部分を円窓と呼ぶ――そこに圧力が抜け、リンパ液の流動を可能にしている。


メンフクロウの耳の外観　　左耳　メンフクロウの耳は左右が不相称である　右耳

したがって、この円窓の面積がある程度大きければ大きいほど、わずかの刺激でも脳に伝えることができるわけだが、これもフクロウ類では、他の鳥にくらべて大きい。また、どの鳥でも楕円窓に耳小柱が接する面の面積は鼓膜よりもはるかに小さく、蝸牛殻内のリンパ液に加わる圧力が増加するようになっているが、その両者の比が、イエスズメでは1：22であるのに、トラフズクでは1：40と大きく開いている。さらに、蝸牛殻の長さは耳が複雑な音を分析できる能力に直接関係しているといわれているが、これもフクロウ類では同じ大きさの他の鳥よりも長い。

まっ暗な部屋での実験

このように耳の構造がわずかな音にも敏感に反応するようにできていることや、視覚に限界があることなどに着目したアメリカのペイン、ドルーリ両博士は、フクロウ類が聴覚を使って獲物を捕えているのではないかと考え、それを実証すべく、次のような実験を行なった。

かれらは、実験場所として、広さ7.5×6メートル、四隅に止まり台があるだけの完全に光を遮断できる部屋を用意し、床に枯れ葉を敷いた。実験台はWOLという名のメンフクロウである。これは幼鳥時から飼いならされた鳥で、はじめはうまくネズミを捕えることができなかったが、実験を開始するころには、止まり台から飛び降りて、直接ネズミをつかむという正常の採餌法を完全に身につけていた。

かれらは第1の実験として、あかりを消したまっ暗な部屋のなかに野外で捕えてきたネズミを放してみた。ネズミはしばらくのあいだ枯れ葉の上をカサコソ動きまわっていたが、その動きが止まった瞬間、WOLは止まり台を離れ、床に飛び降りた。すぐにあかりをつけて見たところ、WOLはつめにネズミをつかんでじっとしていた。かれらは同じことを17回繰り返してみたが、そのうち13回まではネズミを捕えるのに成功した。しかも、失敗した4回のうちには、ネズミからわずか5センチ程度しか離れていないものも含まれていた。その後、WOL以外のメンフクロウも使って同じ実験を何百回も重ねたが、結果は同様であった。明らかにメンフクロウは目を使わないでネズミを捕えたのである。

だが、目を使わなかったからといって聴覚をたよりにネズミを捕えたとはいえない。そういえるためには、メンフクロ

――→ *

渡りの不思議 6

標識鳥の脚環は語る

吉井　正

脚環はその鳥の背番号であり、生いたちや経歴を記した戸籍台帳をめくる唯一の印である。

標識脚環の刻印

鳥類標識調査には、番号と標識機関名（届け先）が刻印された金属脚環（あしわ）が使用されているが、一般の人びとにはほとんどなじみがないので、「標識調査の脚環には鳥の種名や放鳥場所、年月日まで刻印されているのではないか」などと思っている人が相当多い。しかし、現在環境庁が発行している脚環には〝環境庁JAPAN〟という文字と、数字が刻印されているだけである。また、1図はアメリカ合衆国、東南アジア標識機構で使用の脚環刻印であるが、各国で使用されている脚環もだいたい同様で、番号と届け先だけが刻印されている。

標識鳥の記録

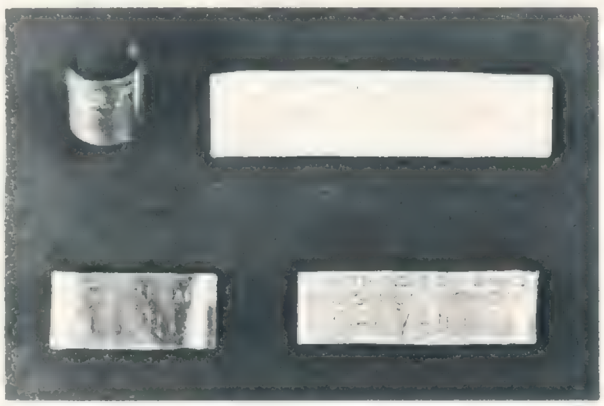
標識鳥は原則として、1羽に対し、1個の脚環がはめられ（標識され）、放鳥される。その際その鳥の種名、放鳥場所、年月日、自然環境、放鳥者（または機関）の住所、名称などが記録される。こうして野外の標識現場で作製された記録を放鳥オリジナルレコードという。

放鳥オリジナルは標識センターに集められ、ここで脚環番号順、種別に仕分けて転記、整理される。番号順に記録したものをバンドレコード（バンドは英語で脚環の意味）、種別に記録したものをスピーシーズレコード（スピーシーズは英語で種）という。こうして作製されたバンドレコード、スピーシーズレコードは標識鳥のいわば戸籍原簿として長く保存され、多くの研究者の利用を待つわけである。この段階で放鳥オリジナルは一応用済み、不必要、ということになるが、転記ミス再点検など、万一の必要に備えて、これもたいせつな資料として保存される。

あなたも学術研究に参加

標識鳥が再びどこかで発見され、報告されることを回収報告というが、標識調査の価値は、この回収報告があってこそはじめて存在し、これなくしてはゼロになる。しかし、この貴重な回収報告は標識専従者より、むしろ一般の人によるところが多い。つまり、標識調査は一般の人の協力に依存するところが大きい。

そこで、もし、だれかが標識鳥を見つけ、脚環番号と発見時の状況（場所、年月日など）を、脚環に刻印された連絡先に報告したとすると、その人はもうりっぱに学術研究における価値ある貢献を果たしたことになるのである。



1図　標識放鳥の脚環　左側のふたつが環境庁JAPANの日本のもの　右上はアメリカ合衆国野生生物保護局のもの　右下は東南アジア標識機構のもので　ホンコンと刻んである

回収記録

わが国内で標識鳥が発見された場合、その回収報告は、ふつう、発見者──→学校、警察、地元鳥類研究家──→都道府県（またはそれらの支庁、出張所など）の鳥獣係──→環境庁鳥獣保護課──→鳥類標識センター（山階鳥類研究所内）という順をへて流れる。

報告を受けとったセンターは、もしその標識鳥が外国からのものであったときは、当該国センターに回収データを送り、そのかわりに放鳥データを請求する。またその鳥が、わが国で放鳥されたものであった場合は、バンドレコードを脚環番号によって検索し、その鳥の鳥種、放鳥年月日、場所を見つけだす。

そしてさらに、スピーシーズレコードを検索し、その鳥に関する詳細な放鳥データ（鳥齢、性別、放鳥年月日、自然環境、放鳥者名など）を抽出し、前記の回収時の資料とあわせて、回収記録原簿を作製する。そして原簿をコピーして標識鳥発見者をはじめ、回収報告伝達に関係した個人、公共機関等に送付する。

脚環の番号が肝心

回収報告伝達の経路は以上のようになっているが、その全過程において、もっとも肝心要（かなめ）なのは脚環の番号である。標識センターでは、報告された脚環番号を唯一の頼りに放鳥記録（バンドレコード、スピーシーズレコード）を検索する。それで、もし脚環番号があやまって報告されると、まったく別の鳥を抽出してしまい、回収報告伝達に費やされた多くの人の善意と労力はむだになってしまう。そればかりか、もしそのミスがミスとして発見されなかった場合、実際には回収されなかった標識鳥が原簿では〝回収された〟として記録され、また実際に回収された鳥は原簿では〝放鳥されたまま〟ということになり、学術研究上たいへんな損害を与える恐れが生じる。こうしたことから、脚環番号の報告は万が一にもあやまって伝達されないよう、関係者は努力、くふうを払っている。

脚環番号の誤報告

脚環番号の誤報告、誤伝達は極力避けねばならぬが、しかし、神ならぬ人間のやること、ごくたまにその誤報告が発生

カラーページ解説

ウがネズミから発散される臭気や熱をたよりにしたのでもなく、コウモリのように自分で超音波を発し、その反響音を利用したのでもないことを証明しなければならない。

そこでかれらは、臭い（におい）がなく、床上の枯れ葉と同じくらいの温度で、しかも枯れ葉の上をカサコソとネズミのように動きまわるものを〝獲物〟として用いることにした。くしゃくしゃにしたネズミ大の紙を糸につけて引っぱってみたのである。あかりを消して糸を引き、WOLが飛び降りてからあかりをつけたところ、WOLのつめにはちゃんとその紙切れがつかまれていた。また、ネズミが枯れ葉のあいだを動く音の出るスピーカーを用いた実験も行なわれたが、結果は同じであった。一方、メンフクロウが超音波の反響を利用して獲物を捕える能力をもっていないことは、カーチスによって、すでに1952年に証明されていた。したがって、これらのことから、メンフクロウが耳を使ってネズミを捕えたことが明らかになったのである。

次に、かれらは、音源までの距離や方向を感知するのに両耳を使う必要があるかどうかを確かめるため、WOLの一方の耳に綿を詰めてあかりを消してネズミを放した。WOLが飛び降りてからあかりをつけてみると、ネズミまでの正しい線上にはいたものの、それに約45センチほど足らなかった。別のほうの耳をふさいでやっても、結果は変わらなかった。だが綿をはずしてやれば、ちゃんとネズミを捕えた。つまり、片耳だとおよその方向は見当がついても、距離を正確に計ることはできないのである。

これら一連の実験により、メンフクロウが野外でも夜に聴覚を用いて獲物の居場所を確かめ捕えていることは確実になった。そして、これは耳の構造のすぐれた他のフクロウ類でも同様だと思われる。これを裏づけるもうひとつの事実をつけ加えておこう。

ネズミの音声に〝同調〟する耳

一般に鳥は同種個体の出す音声にもっとも敏感なものである。ところが、フクロウ類は自分たちの出す音声よりもずっと高い音に敏感であり、しかもその高さは、かれらの多くが主食としているネズミの出す音声の高さにほぼ一致しているのである。いわば、ネズミの音声に〝同調〟するわけである。

だが、このすぐれた聴覚にも限界はある。ヘイン博士らのその後の実験では、音源までの距離が6メートルを越すと、獲物を捕える精度が鈍ってくるという結果がでている。

おそらく、野外では、それぞれの状況に応じて、目と耳を使いわけたり、組み合わせたりして、えさをとっているのであろう。また、フクロウとひと口にいっても種によって夜行性の程度や主食とする動物とその採餌法などにも違いがあり、それに応じて目や耳の特殊化の程度にも差が見られる。たとえば、夜行性でも空中を飛んでいる昆虫（こんちゅう）類やコウモリをとるアオバズクでは、はっきりした顔盤は認められないし、耳孔も左右相称である。一方、目には容易に見えないくさむらのなかにいるネズミをえさとしているコミミズクでは、昼間もかなり活動するにもかかわらず、すぐれた耳の構造をもっている。だから、目と耳のどちらを多く使ってえさをとっているかということも、それぞれの種によって異なっていることは想像にかたくない。■　（浦本野外動物研究会会員）

する。その一例は数年前に起きたことである。

北海道でアメリカ合衆国標識の1羽のマガン（ガンの一種）が発見され，その回収報告が標識センターに送付されてきた。マガンのアメリカからの渡来は貴重な新記録でもあるので，同センターはさっそく米国標識センターに回収報告を送付し，その返事として米国センターから放鳥記録が届くのを首を長くして待った。しかし折り返しきた返事は放鳥記録ではなく，「日本側で回収報告の誤った伝達がなされたらしい。その鳥がマガンかどうか怪しいので再確認して欲しい」ということであった。

調査したところ，この鳥の識別には林野庁のベテラン技官（当時の鳥獣行政担当は環境庁でなくて林野庁）が立ちあっており，マガンにまちがいがないことが判明したので，こんどは逆に，アメリカ合衆国の標識者が種名を誤記したのでは，という疑問がもたれた。しかし米国センターの調査により，日本側からの報告の番号に誤りがなければ，その番号の脚環はマガン用ではなくてひとまわり小型なカモ用のものであること，したがってマガンに使用することはない，また疑われたアメリカの標識者の調査地域ではマガンは生息しない，ということが判明し，結局わが方の番号誤報の可能性が強くなった。

そこで脚環の現物を取りよせて番号を確認することになったが，この鳥の死体にはめられていた脚環は，前記林野庁の技官と同行の一米国人が帰国後センターに届けるといって持ち去ったまま行方不明で，番号を再確認できず，このマガンが北アメリカのどこからきたものか，ついに永遠のなぞとなってしまった。

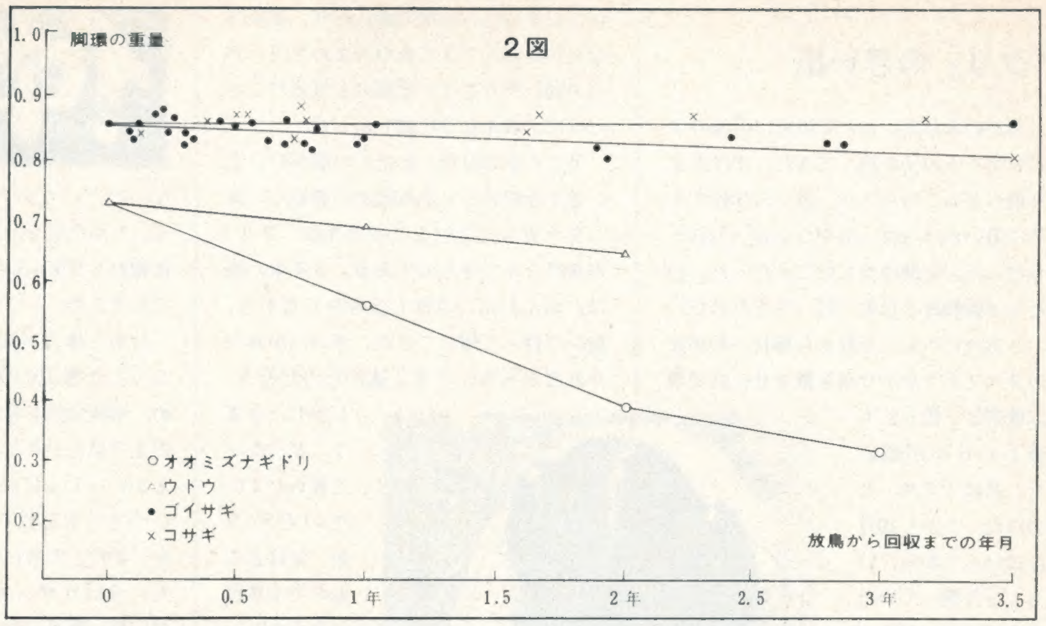
番号システム

最近，1億国民総背番号とか，総番号化とかいうことばが使われだしているが，脚環番号もいわば標識鳥の背番号である。ところが背番号を付すべき対象の標識鳥の数は何千，何万，何十万羽の多数にのぼるので番号システムをうまくつくり，あとで整理，抽出を便ならしめる必要がある。


捕えたシギに脚環をつける　撮影　筆者

本年度からの環境庁採用の脚環にはたとえば010－00001，140－11582というように3桁のガイド番号と5桁の一連番号とが用いられている。ガイド番号用の上2桁は脚環のサイズ（鳥のサイズ）を現わし，01はツバメ，02はそれより少し大きいウグイス，14では最大級のアホウドリ，ツル用となる。

ガイド番号の下1桁の数字は，ガイド番号に続く5桁の一連番号が，00001から始まって99999に達したあと，さらに脚環を製作する場合に，0から1に変わり，さらに2，3，4，……，9と変わる。これによって，ツバメ級，ウグイス級など，各サイズの鳥をおのおの99万9999羽まで脚環番号化できる。



脚環の摩耗と腐蝕

野生の鳥は，雨にも負けず風にも負けずどころではなく，シギやカモメ類のように泥水や海水に浸るものが多く，なかには繁殖期には土中に穴を掘って生活し，繁殖期以外は洋上で暮らすオオミズナギドリのようなものもいる。したがってこれらの鳥に用いる脚環は摩耗・腐蝕に対してかなり強くなければならない。

そこで本年度から脚環の材料として，海水腐蝕や土砂による摩耗に強いモネル（銅，ニッケル等の合金）が従来のアルミニウムに代わって採用された。しかし，モネルはアルミにくらべて比重が大で，鳥の重量負担を大にし，またかたくて刻印を深くすることが困難であり，鳥のあしへの着脱がむずかしくなるという欠点もある。それで摩耗，腐蝕をそう懸念する必要のない小型陸鳥類用脚環には，依然としてアルミ材料が用いられている。

さて，いかに刻印が深く，材料良質の脚環も，長年月のうちには摩耗して判読しにくくなり，1と7，3と8，4と7などの識別も困難となる。そのため，脚環番号の「字体」に考慮が払われる。なお米国標識センターでは警察の鑑識班さながらの化学処理，光学処理の方法により脚環番号判読を容易にしている。わが国の標識関係では，まだこうした技術の採用までにはいたっていない。

脚環摩耗も一役

以上のように，脚環摩耗は鳥類標識調査研究上たいへん困る問題であるが，しかし，意外な興味をわたしたちに与えてくれる。

脚環が適正に製作され，重量誤差が微少であると，使用前の重量と回収後の重量を測定することにより摩耗度を知ることができる。わたしたちは試験的にオオミズナギドリ（繁殖期には土中に穴を掘り営巣。繁殖期以外は海上でのみ生活），ウトウ（前種と同様），コサギ，ゴイサギ（湿地で採食，樹上で就眠）に使用したアルミ脚環を微量重量計で計測し，摩耗度が上記の鳥種順に見られることを知った。この測定で，脚環の摩耗は鳥の生活形態によって異なることが明らかとなり，また逆に，脚環摩耗から鳥の生活形態の差違を発見できるのではないかという楽しみが生じてきた。

たとえば**2図**が示すように脚環の摩耗がオオミズナギドリとウトウではかなりの差があり，両者の生活形態が予想外に違うことがわかった。また同じ場所に集団繁殖し，採食場もだいたい同じであるゴイサギとコサギの脚環摩耗にもわずかながら差違が見られ，研究者の新しい興味をかきたてるにじゅうぶんであった。

こうなると，〝じょうぶで長持ちする脚環〟を真剣に希望する標識関係者も，だれかが戯れに「強いばかりが能ではない。弱い脚環も役にたつ」といったことばを，単なるジョークとして聞き流すわけにはいかなくなった。■

（山階鳥類研究所標識研究室長）

漢字のふるさと　66

藤堂明保



鶉（うずら）　中国では晏鶉（ānchun）という。華北の11月，おおかたコウリャンを刈りおわった畑の一角を1アールほど残して，ぼうぼうと立ち枯れするにまかせておくと，夜なかにそこへウズラが何十羽も宿るのだ。夜明け前に霜をふんで一方に仕かけた網へむかって，ホーイ，ホーイと追いたてると，まるまる太ったウズラが，どっさりとつかまえられるのである。

今日のことばでは鷃をそえるが，それは安（下におちつく），按（下におさえる），晏（日が下におちる）などの an と同系で，「低く下にさがる」という意味をそえたものだ。ウズラは背が低くて，低く下にさがって飛ぶからである。

文語では昔から鶉（ジュン）といった。「鳥＋享」からなる字である。享とは，上下（南北）に門があって，人家をとり囲んだ土壇の姿を描いた象形文字で，つまり墩（土盛り，土べい）の原字である。土べいは下がずんぐりとふとく，重そうに腰をすえている。そこで敦（トン，ずっしり），諄（ジュン，おちついた）のように，およそ享を含む字は，下ぶくれでずっしりしている，という意味を含んでいる。ウズラは軽快な鳥ではない。ずんぐりとして下ぶくれであり，どちらかというと動作もにぶい。そこで鶉というのである。さらに今日の口語のように晏（低い，おちつく）をそえると，ますますずんぐりした感じがよく表わされる。晏鶉を鵪鶉と書くこともあるが，同じことである。■



「クリ」の思い出

去年の８月末，わたしの家に近所の子どもがハトの子を持ってきた。まだあまり飛べないこのハトが，近くの学校でイヌに追いかけられ，あやうく食べられそうだったのを助けたとのことだった。わたしが動物好きなので持ってきたのだ。

さあたいへん，それから毎日，わが家の５人でえさをやり水を飲ませ，庭で飛ぶ練習と，忙しくも楽しい日々が続いた。名は「クリ」とつけた。しかし10月にはいってから，いっしょに飼っていた小鳥がネコにひっかかれて死んでしまった。それを横で見ていたであろう子バトは，次の日，庭からどこかへ飛んでいってしまった。

このときは３日めに帰ってきたが，それもつかの間で，１週間ほどたったある日，庭に出して遊ばせていたら，あっという間にネコにくわえられて持っていかれてしまった。屋根で遊んだり，部屋のなかへはいってきて食卓のまわりでバタバタ騒いだりして，家族の人気者だっただけに，ほんとうに悲しかった。

ところが13日後，わたしの娘がいっている小学校の，しかも彼女の教室に，あしをケガして立つことのできぬ「クリ」が飛びこんできたのである。３年生の娘は，わんわん，うれし泣きをしながら，抱いて持って帰ってきた。ネコにかみつかれながらも，うまく逃げたのだろう。


ネコにくわえられてあしが立たなくなった「クリ」はつばさを使って　少しずつ移動しようとする

しかし，今まで，どうやって暮らしていたのだろうか。足はぶらぶらで全然役に立たない。

鳥かごに入れてやったが３日間は何も食べず，だんだん体重が減っていくばかりだ。４日めから少しコムギを食べはじめ，ウンチも出るようになった。しかし困ったことには，足が立たないので，ウンチでよごれっ放しである。しかたなく，温泉の湯をくんできて毎朝おしりをふいてやるのが日課になってしまった。

しかし体力が続かなかったのだろう。こうした努力の甲斐もなく，11月はじめ，家族全員が見守るなか，わたしの手の上で息を引きとった。たった50日ほどしかいっしょにいなかった子バトだが，いつまでも忘れられないような悲しみを，わたしたちに残して世を去っていった。今はサザンカの咲く，わが家の庭で，長い眠りについているのである。■

（別府市・山中正行・39歳・音楽家）

高島のオオミズナギドリ

京都から下関へ向かう山陰本線，それを日本海を右手にながめつつ下っていくと，山陰路も終りに近い島根県益田市の沖合いに小さな島が見えてくる。周囲３キロ余のこの島は，本居宣長の『玉勝間』にもその名が登場する高島である。去る９月末，わたしはオオミズナギドリに会うために，この島を訪れた。

やがて日は落ち，夜は深まる。そして闇のなかに虫の声だけが聞こえる深夜，わたしは島の北端にあるアナジ山の麓に立っていた。あたりは静まりかえっている。鳥は，もうこの島にいないのか。

と，突然，もう零時近くなっていたが，「ピョウイ，オウオ，オウオ，ピョウイ……」という鳴き声。急な訪問に驚いたのか，４，５羽のオオミズナギドリが近くから飛びたった。しかし，一晩じゅうあたりを捜しても，半分土に埋まった巣穴がひとつ見つかっただけだ。

それでも翌朝，そのすぐそばでかれらのコロニー（集団営巣地）が見つかった。巣穴は計８個。入り口は20センチ，深さ１メートル以上に及んだ。そのいくつかには羽毛，風切羽，ふんなどがあり，繁殖の跡を物語っていた。

かれらは海上で漁をしているのだろう。会えないのが残念だった。高島のオオミズナギドリは細々ながらではあるが現在も繁殖していた。地元の人たちの話では，子どものころには，夜，手で捕えられるほど多かったという。なぜ，こんなにオオミズナギドリが減少してしまったのか，わたしにはわからない。とにかく，これからもずっとかれらがすみ続けられる高島であってほしいと思う。■

（益田市・田原良隆・17歳・高校生）



ペット相談室

担当　前川博司

子ネコの脱肛

〈問〉 生後３か月のネコですが，肛門から赤い管が１センチくらい出て，痛がります。１か月ほど前からなのですが，どうすればよくなるのでしょうか。

（福岡県甘木市・桑野春美）

〈答〉 イヌでもネコでも下痢や便秘のために肛門が刺激を受け，炎症を起こして腫れ，外に突きだすことがあります。さらに進んで肛門が反転して突きだし，腸の一部まで出てくることがあります。軽いものは脱肛，重いものは直腸脱になるわけです。



幼時期には，下痢や便秘のためにつねに刺激を受けた肛門の周囲の筋肉が弛緩し，血管はうっ血して腫れ，軽い脱肛状態を起こすことが多く，一度起こるとなかなかなおりません。ご質問の場合はこれの重いもので，１センチも赤い管が出ているならば，脱肛も強く，痛みもひどいと思われます。



治療方法ですが，傷用の軟膏とか，油を局部につけ，静かに押しこんで元にもどすことが必要です。その後，収斂剤を塗ったり，座薬を肛門のなかに押しいれたりします。人が痔の治療に使う座薬がよく，子ネコではその半分を１日１回，肛門の中へ入れるとよいようです。

同時に腸のぐあいをなおすこともたいせつです。下痢や便秘の手当てをするわけですが，便の調子を整えるために，食事をがらりと変えてみるのも，ひとつの方法です。

ところが下痢や便秘でもないのに，離乳期ごろから，いつのまにか肛門が少し突きだしてくることもあります。ときには痛がってはいても，排便にはあまりさしつかえがないことが多く，成長とともに自然になおってしまう場合が多いものです。こうした軽い脱肛は，幼時期の体質的な原因から起こると考えられ，ふつうは成長とともになおってしまいます。



脱肛がひどく，押えても元にもどらないときとか，納まってもまたすぐに出てくるようなときには専門医に見せなければなりません。

重症の場合は手術が必要となります。元に納めてから，肛門を縫い，穴を縮めて脱出を防いだり，もっとひどい症状になると腸の一部を切りとったり，腸をおなかのなかから引っぱって動かないようにする手術などが行なわれます。■

（動物愛護協会附属病院院長）

裏表紙説明

リス *Sciurus lis* 南アルプス鳳凰岳の鳳凰小屋は，標高2400メートルの地点にあるが，冬になると，深い雪のなかを，三々五々リスが集まってくる。

冬は，木の実などを主食とするリスにとって，食糧が欠乏するきびしい試練の季節だ。生き抜くためには，人間との共存共栄も一策である。かくて，山小屋のゴミ捨て場に捨てられる残飯を目ざして，毎朝のご出勤となるわけだ。

リスの出てくる時間は，早朝５時から９時ころまでで，ものおじせずに，えさをあさっていく。かなりの距離まで近づいても逃げださない。繁殖期の用心深さとくらべると不思議なくらいだ。

リスは，吹雪く前の日にはとくによく出てくる。かれらの本能が山のご機嫌を敏感にキャッチするのだろう。食いだめておかなくっちゃというわけだ。■

撮影　島田　忠

▶訂正　増刊「パンダ」21ページの写真の説明が「カンカン」となっていましたが，これはワシントン動物園へいった「シンシン」の誤りでした。

次号予告

1月17日発売



カッコウのひなと仮親のヨーロッパヨシキリ

世界動物百科

96号　1／28

カラーページ

ホトトギス目

エボシドリ科　エボシドリ

ホトトギス科　カッコウ，ホトトギス
ツツドリ，ジュウイチ
オオハシカッコウ
オオミチバシリ

私たちの仲間

海からの使者(中)　藤原英司
オポ——よみがえった伝説

漆黒の世界の支配者　伊沢紘生
アマゾン動物記 8

カッコウ類のタカ斑擬態　黒田長久
カラーページ解説

生きものの世界への疑問 1　日高敏隆
種——この不思議なもの

漢字のふるさと 67　藤堂明保
雁（がん）

第65号～第128号(鳥類)のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

第1号～第64号(概説・哺乳類)のおもな内容

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。

毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。

なお，本社直接購入のご希望のかたは，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100
TEL. 03―212―0131

朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3－3　〒530
TEL. 06―231―0131

朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1―12―1　〒802
TEL. 093―531―1131

朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1―3―3　〒460
TEL. 052―231―8131

世界動物百科　通巻96号　昭和48年1月21日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



リス　　説明 30ページ

雑誌0633－1／21